

カフカスと日本の古代民族交流を示す言語、宗教、鉄器等についてーアーリヤンの後衛カバルディニアールカリア民族を中心としてー

菅原総合武道研究所 菅原鉄孝

はじめに（アルタイとエルブルース）

もし、モスクワ市内で道行く人に「ヨーロッパで一番高い山はどこですか？」と尋ねたら、「アルタイとコーカサス（以下、カフカスという）のエルブルース」と答えが返ってくるに違いない。それほどこの二つの山は有名である。アルタイ山脈には東ヨーロッパの最高峰ベルーハ（白山の意味、約四五〇〇^{メートル}）があり、カフカスには西ヨーロッパの最高峰エルブルース（約五六〇〇^{メートル}）があるからだ。アルタイには数万年前からシャーマニズムやアニミズムが発生し、エルブルースでは神道が育った。そこから更に仏教、キリスト教、イスラム教など諸宗教が派生したのである。それ故に、エルブルースのあるカフカス地方は、青銅や鉄器文化の起源として、青銅器や鉄器をアルタイ方面に伝えたスキタイ等の歴史的起源として、また言語的に世界中から注目されているのである。しかし、今まであまり日本には紹介されていない。

このエルブルースに紀元前七千年からアーリヤンが住み着いたと言われている。スキタイもアーリヤンの後衛だが、スキタイは今から約千年前に消滅した（地元関係者）。今も生存する後衛カバルディニアールカリア（少数民族国家）の文化は、嘗てギリシャ、ペルシャ、インド、エジプト、東西ヨーロッパ、そしてスラブ民族、日本など多くの国々に非常に多くの影響を及ぼした。恐らく、中国文化（南北朝鮮文化も含めて）の起源としても、将来は注目される日がくるにちがいない。

エルブルースは神道を育て日本の南方文化として影響を与え、西シベリアのウラル・アルタイ山脈はシャーマニズム文化を育て日本の北方文化形成に寄与したと考える。その開始年代は、恐らくアーリヤンが移動した紀元前七〇〇〇年以降の事であろうか。

アイヌ語はウラル・アルタイ諸語系であり、南方文化の言語はエルブルース山の周辺のテュルク語系と見られる。エルブルースの文化はシルクロードを経由して直接日本に、あるいはインドを経由して移入されたと推定される。

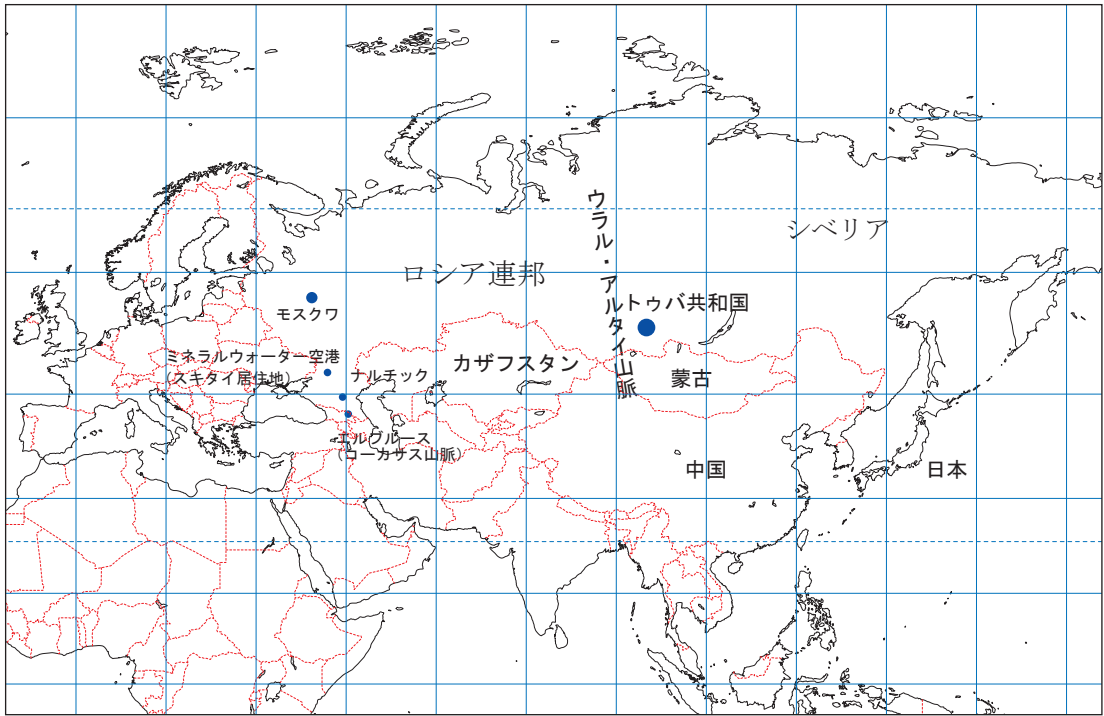


図1. アルタイとエルブルースの位置

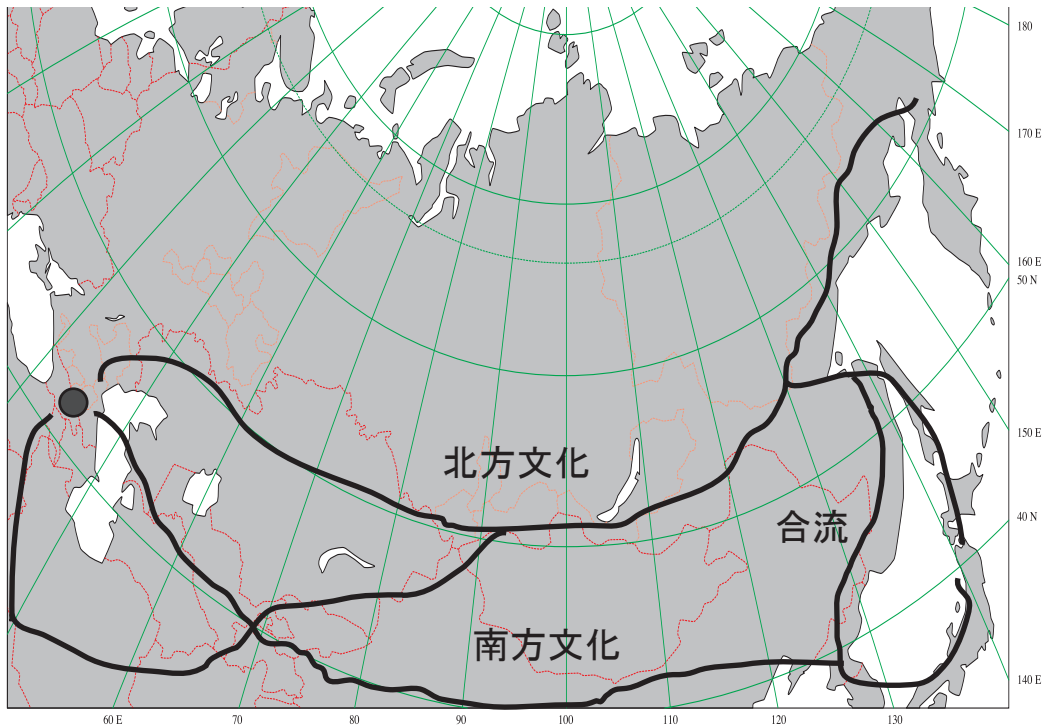


図2. 北方文化と南方文化の予想経路（筆者の概念）



図3. 左からハナミ・タヤ（ロシア、ギリシャ系）、ユージン・パラマノフ（キルギス出身）、ピアスラン・アタビエフ（バルカリアン）、イルヤ・ソロニツィン（ロシア、タタール系）の各氏

南回り文化は、中国や朝鮮半島を経由して移入されたので、中国文化あるいは朝鮮文化として見られがちだが、もっと先のカフカスに眼を向ける必要がある。

本論は、鉄の起源イロン（IRON。エルブルース山周辺のアーリヤンの国、現在は北オセチア共和国、グルジア共和国の一部）とエルブルース山麓のアーリヤンの子孫カバルディニア・バルカリヤ民族文化を中心に、古代に於ける日本との交流関係を示す宗教、言語、鉄器などを考察し、日本文化と比較研究するものである。カフカスには刀剣の起源、甲冑の起源、武術の起源、城の起源、神道の起源、日本語の起源、円墳の起源など、興味ある研究課題が山積している。特に舞草刀研究の趣旨から、形質両面からバルカリヤン刀（ダマスカス刀）と日本刀を比較研究し、平安・鎌倉期の刀剣を再現するのが最終的な目標である。

ここに掲載するバルカリヤン（及びゴザック兵）のダマスカス刀、城郭、カバルディニアン居住地の円墳、発掘出土品などに関する資料は、カフカス考古学研究所とナルチック国立博物館の提供によるものが主である。また地元でアーリヤン文化を研究するユーリ・セルゲーエフ氏や、三百年前のバルカリヤン刀を所持するバルカリヤン、ダマスカス刀を作刀する刀剣鍛冶に直接面会し、研究成果をお聞きできた事は、非常に幸運であった。今回の踏査では、多くの情報収集に奔走してくれたユージン・カラマノフ氏、カフカス考古学研究所のピアスラン氏、ナルチック国立博物館館長、モスクワから同行してくれたイルヤ・ソロニツィン、タヤ夫妻に深甚なる謝意を評したい。

日本語に共通するカバルディニア・バルカル語（約五百語）に関しては、ナルチック市在住のナジズ・ブダエフ氏の著書（ロシア語版）を翻訳して紹介する。ブダエフ氏は、最後の一冊で

ある著書にサインして筆者に寄贈してくれた。心底から感謝申し上げたい。どこまで紙面が許されるか心配だが、全文が非常に重要なので、数回に分けてでも『紀要』に紹介される事をお願いしたい。

一、アルタイと神話

(一) アルタイの九つの山

アルタイ山脈はロシア、蒙古、中国、カザフスタンの国境にまたがる大山脈である。ユーラシア大陸の真ん中に位置する。筆者は東シベリアにあるトゥバとハカシア共和国を二〇〇四年八月に訪問した。旅行の目的は、スキタイの蒙古人に与えた影響、ならびにシベリアに発生したシャーマニズムと日本の

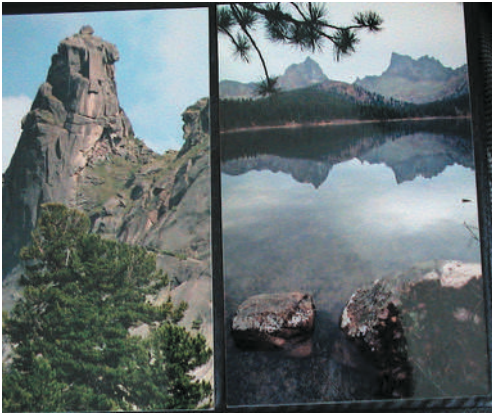


図1-1. アルタイ山脈最高峰ペルーハとみられる山。九つの山をシャーマンは拜む。

シャーマニズムとの関連性を実際にシャーマンに会見して情報を得る為であった。この関連性については同行した鈴木聖雄氏が舞草刀研究紀要に既に報告しているので、重複は避けたい。

ところで、アルタイの名称について筆者がシャーマンに

「金山の意味ですか？」と質問したところ、「それもあがるが、他にもっと重要な意味をもっている」と教えてくれた。そして、シャーマンは太鼓を示し、「アルタイの九つの重要な意味をもつ山が太鼓に入っている」と教えてくれた。しかし、それ以上の説明はしてくれなかった。更に「シャンバラ」について質問したところ、「シャンバラ」は一つの精神である、と教えてくれた。シャンバラは日本の神話タカマガハラに関係していると思われるので、その理由については後述する。筆者はエルブルースを二〇〇五年に訪れて、アルタイの意味が徐々に判ってきたので、想像を含めて説明を試みることにしたい。

(二) アルタイの名称

アルタイにはエルブルースと共通するアーリヤン思想が入っている。その一つがギリシャ神話である。ギリシャ神話はアーリヤン思想によつて構成されていると考えられる。なぜなら、アルタイの名称は、ギリシャ神話に登場するわし座の α 星アルタイルから来ていると思われるからである。

アルタイルは南天の牽牛星で、通称は彦星である。天の川を挟んだ二人が一年に一度だけ柵機(七夕)の七月七日の夜に



図1-2. 星座を表す石。この石の間から特殊なエネルギーを発する場所に入る。

織姫（琴座のα星ヴェガ、北天）と会うという伝承である。この時、機織りが上手になるようにと祈るのが「たなばた祭り」で節句の一つとなっている。

わし座は、アルタイル（牽牛星）など九つの星によってできているのであろう。

(三) イヨマンテ（アイヌの熊送り）とイ

ワクテ（物送り）

アイヌの人たちは、熊の霊をあの世に送る祭りをイヨマンテ、物の霊を送る祭りをイワクテと称している。この祭りは、星座に関係していると見る事が出来る。

大熊座、小熊座があるが、この星座に熊の霊を送ることをアイヌの人たちは「イヨマンテ」と言っているのである。この思想はアイヌ民族に限らず、亡くなった人の精霊をあの世に送る風習は、日本の神社の年中行事の一つにもなっており、「御霊祭」と云われている。物の霊を送る「イワクテ」は、生活に使ったものや大事な宝物などを地下に埋め、あの世に送る行事であるが、最近は行われなくなっているようだ。伊勢神宮の刀剣を地下に埋める行事は、勿体ないので約二十年前に中止したそうである。

神道の「御霊送り」やアイヌのイワクテ思想は、更に亡くなった人の精霊を迎える仏教行事「盂蘭盆会」と連なり、精霊を慰める旧暦七月十五日の盆踊りは、七夕祭りと共に日本中に普及している。仏教と神道、そしてシャマニズムが近接していることが判る。

「熊送り」は何所で始まり、どうしてアイヌ民族に伝わった

かということは、ギリシャ神話に由来しているので、ギリシャ、エルブルース、アルタイ方面とみるのが、北方ルートとしては妥当な線ではないだろうか。この伝承には、スキタイやテュルキーが関わった事は、多いに考えられる。

(四) アルタイの干支

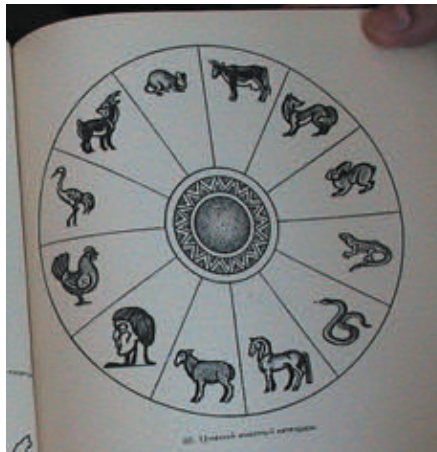


図 1-3. アルタイの十二支

ウサギ、トカゲ、蛇、馬、羊、シャマン、鶏、鶴、鹿である。このように、干支の動物は場所によって変化していることが判る。

(五) アルタイのテュルキー

エルブルースからやってきたスキタイは青銅器と鉄器を使い蒙古人と戦ったので、蒙古には製錬技術など文化的影響を及

アルタイの

シャマンである
ジェレミー氏によ
ると、テュルキー
には十二支がある
という。中国の干
支やギリシャ神話
天の黄道十二宮と
は異なり、シャ
マンと十一の動物
によって構成され
る。時計回りで、
ねずみ、牛、狐、



図1-4. スキタイと糾合した蒙古人の正装。三巴、獅嚙紋、卍のシンボルを身につける。



る」と呼ばれていることは周知のとおりである。スキタイと蒙古の文化を再現している白銀師は、獅嚙紋、卍巴紋、三つ巴紋などを作成していたのが印象深い。これらの紋様は、中国や日本の宗教に影響を与えているばかりでなく、アイヌ民族にも伝わっているものがある。それは卍巴紋である。しかし、北海道のアイヌ民族自体、本州から伝わったと思っっているのではないだろうか。

ぼしている。蒙古から日本に伝わった製鉄技術は、タタラ（タタール、蒙古の軍部を意味す

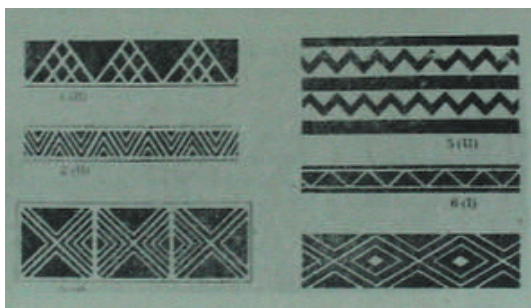


図1-5. アルタイのチュルキーのシンボルマーク。このシンボルは、日本刀の刃文小丁字に関連しているはずである。

一列に長く建てられていて、郷愁を抱きつつ、寒冷のシベリアで埋葬されたのであろう。

(六) テュルキーの武器

蒙古人と戦ったスキタイ民族は、エルブルース山方面から草原ルートで侵攻した。最初の侵攻は紀元前六世紀頃であるが、蒙古人と糾合してうちたてられたテュルク（突厥）国（現在のハカシアとトゥバ共和国）の年代は西暦五〜七世紀頃である。

発掘されたクルガンから出土品は全て青銅製で、アキナケス型と呼ばれる羊角刀や鏃である（図一〇六、七）。紀元前の青銅器時代の物を示している。

図一〇九〜一二は、シヤマンのジェレミー氏が所持していた著書からの転載である。甲冑は、エルミタージュ博物館に展

テュルク（突厥）国時代からこの地に生息する人々たちを、アルタイのテュルキーと称する。テュルク語は現在のトルコ語よりも更に古語で、縄文時代の共通言語として広範囲に使われていたようだ。「テュルク」は、「市場」や「商業地」の意味からきているらしい。アルタイで死亡したスキタイの人たちのクルガン（古墳）周辺に建てられた列石は、西南方を指していた。彼らがカフカスに強い



図 1-6. アルタイ東部ハカシア共和国のクルガン（円墳）出土品（ハカシア共和国国立博物館提供）



図 1-7. アルタイ東部ハカシア共和国のクルガン（円墳）出土品（ハカシア共和国国立博物館提供）

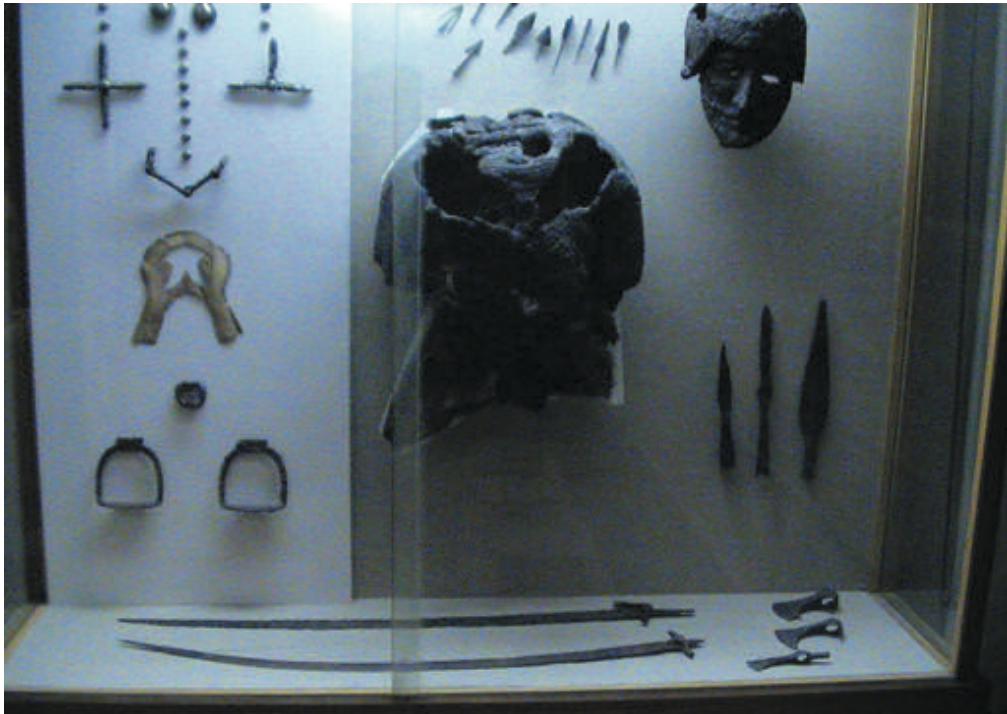


図 1-8. アルタイのチュルキーの甲冑と刀剣（エルミターージュ博物館にて筆者撮影）

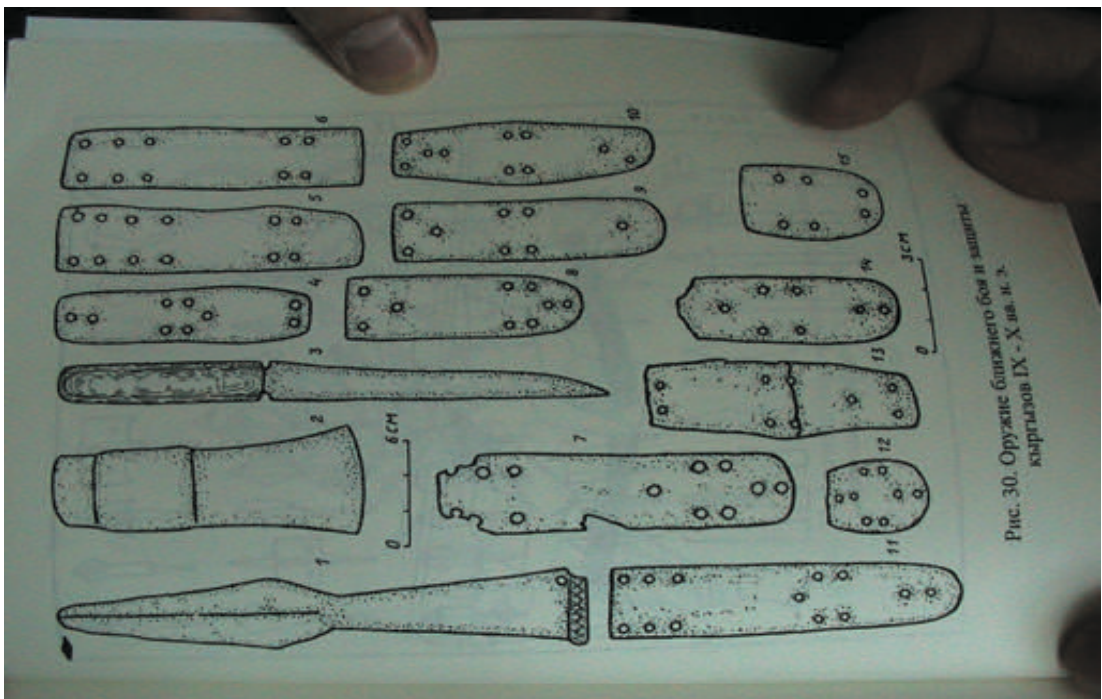


図 1-9. 各種小札と袋槍：アルタイのシャマン、ジェレミー氏が説明した著書による

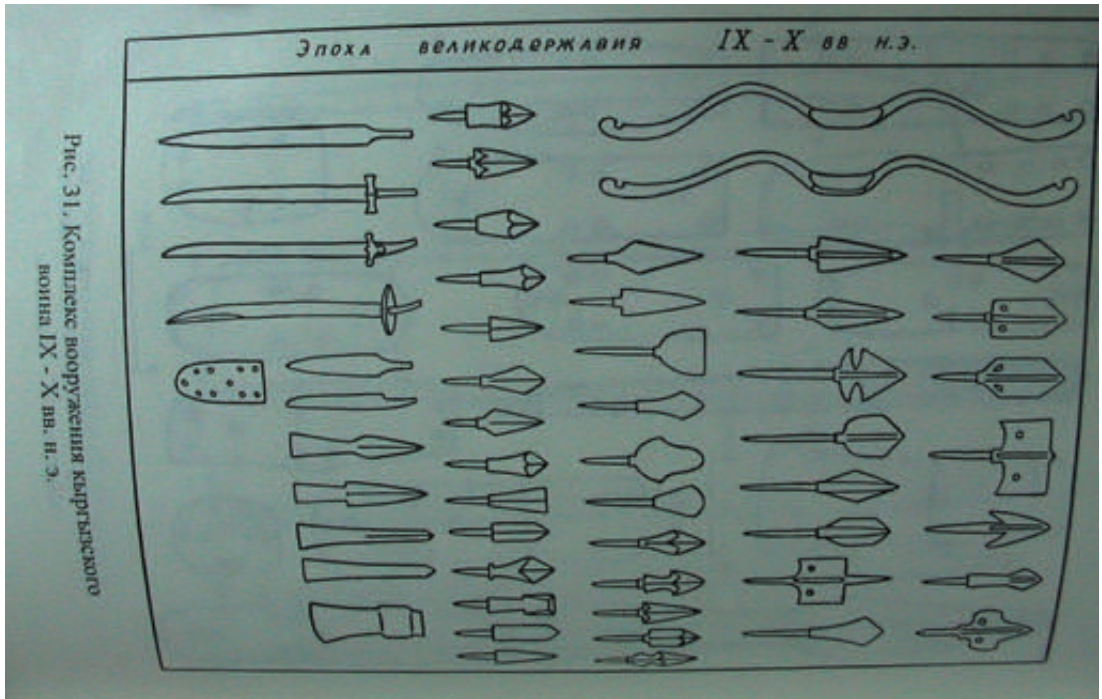


Рис. 31. Комплексы вооружения кыргызского вонга IX - X вв. н.э.

图 1-10. 各種鏃：アルタイのシャマン、ジェレミー氏が説明した著書による

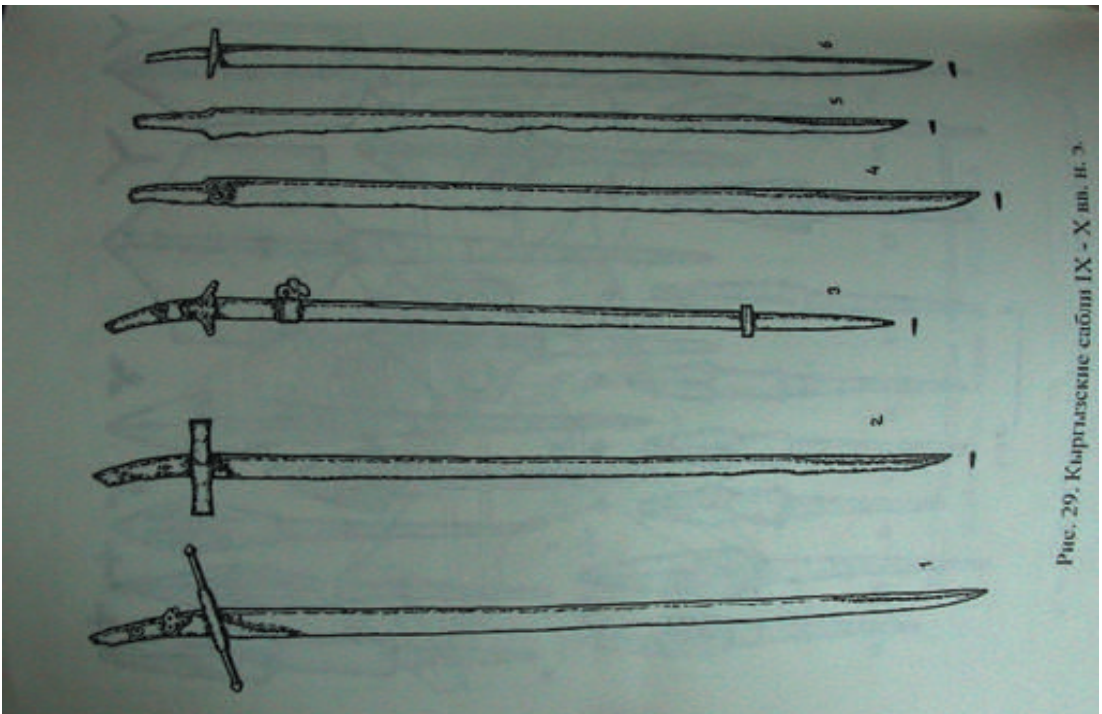


Рис. 29. Кыргызские сабли IX - X вв. н.э.

图 1-11. 各種刀劍：アルタイのシャマン、ジェレミー氏が説明した著書による

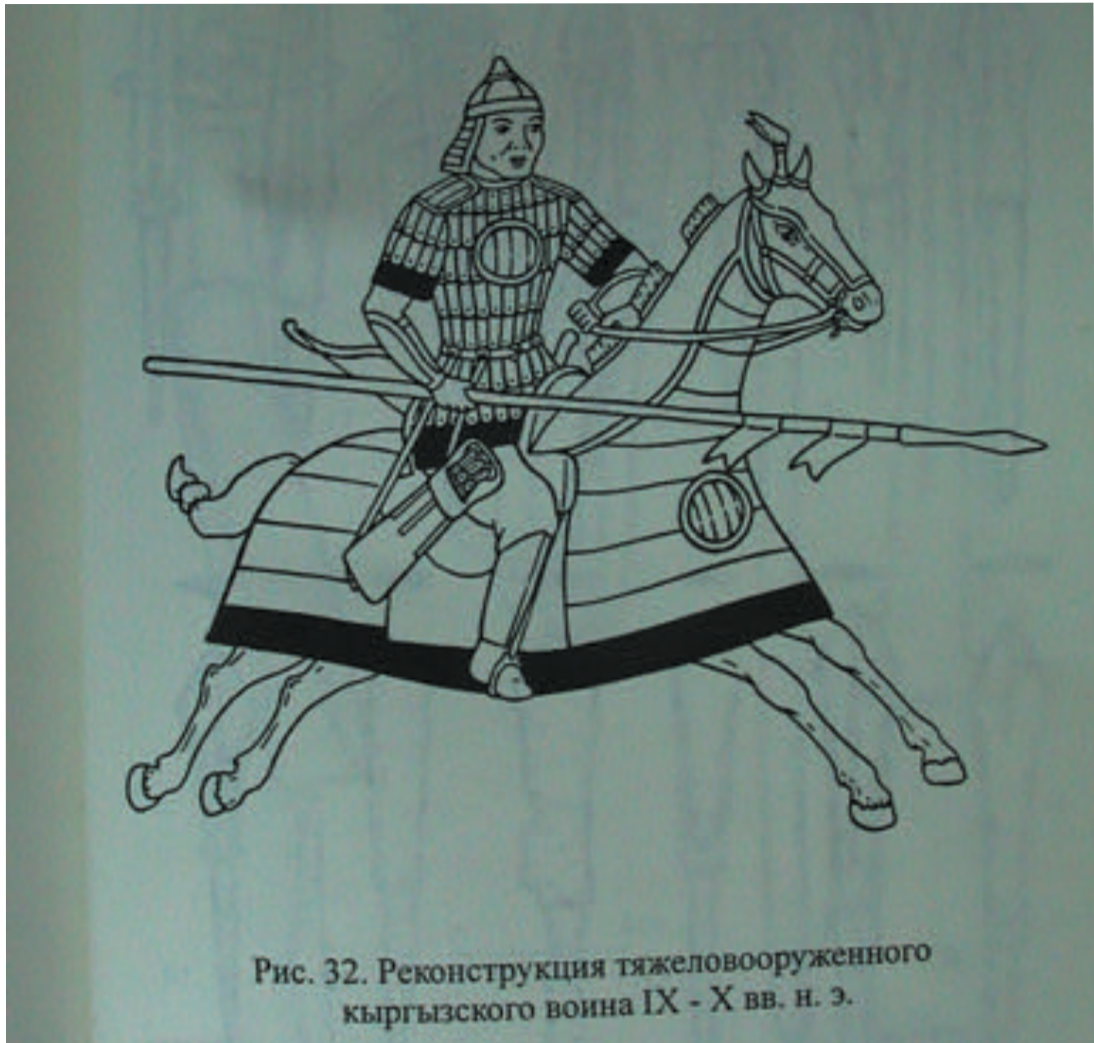


図 1-12. テュルキーの武士：アルタイのシャマン、ジェレミー氏が説明した著書による



図 1-13. (左) 特別なエネルギーを発するアルタイの岩。(右) 左からセメンチュック氏夫人、セメンチュック氏、テュルキーのマカシェフ氏、シャマンのジェレミー氏、通訳の熊倉氏、合気道門人（サンクトペテルブルグにて 2003 年撮影）

示されている物(図一十二)とほぼ同様の造りであった。小札を使う技術は、バルカリアンの挂甲と同様である。

二、北方文化(ウラル・アルタイ文化)の日本刀に与えた影響

日本刀の中心(茎/なかご)尻や柄巻きには、アイヌ文化が非常に大きく影響している。例えば、茎尻の山形、入山型、舟形、切(三)形はアイヌの墓標にそのような形が見られるし、柄巻きはアイヌのイクパスイ(髭揚莖)に彫刻される(二頭のシャチ)をシンボル化して表現していると思われるからである。このアイヌと呼ばれる人たちのシンボル研究は、イタリヤ人フオスコ・マライニ氏がアイヌ部落に滞在して究明されたものである。柄巻きや反りについては、筆者が『舞草刀研究紀要』六号に掲載したとおりである。このアイヌ文化系は、ウラル・アルタイ言語に近似しているところから、ウラル・アルタイ文化と見る事にしたい。

日本刀が形成される平安中期以前の蔵手刀の(蔵(渦巻き)手)も、アイヌの墓標の中に見いだす事が出来る。当然ながら、これらの墓標の種類は現在の日本刀に見られる茎の種類よりも多様であり、宮城県塩竈神社に保存されているアイヌ刀の茎の形は非常に多く、殆ど同じ物が見られない。茎や目釘孔の数は、作刀者を示すシンボルでもあり、某かの相違点を有するのは当然の事である。この考え方は、現在の作刀グループにも当てはまる。

アイヌ文化は斯様に古くから日本の鉄文化に深く関わり、一般の人々もその文化を受け入れてきた。しかし、立鼓柄の形

を墓標から見いだす事が出来ないのも、それは日本を取り巻く中国を経由してたどり着いた異文化としてとらえるべきなのであろう。異文化が日本に移入された事実も、弥生時代、古墳時代、飛鳥、奈良時代といった各文化期に編纂されていることから明らかである。

アイヌの人々は太陽神、陸の神、空の神、山の神、海の神、沖の神など十三神を祭るが、それらを動物に化神して見ている。空の神は鶴、陸の神は熊、海の神はシャケ、沖の神はシャチ、村を守る神はフクロウといった具合である。したがって、アイヌの十三神は、日本神道にそのまま合致しない。

それでは、日本の神道や言語、習慣はどこから来た文化なのだろうか。アイヌ語は日本にかなり広範囲に普及している事は地名などから推測できる。昨今は、アイヌ語がウラル・アルタイ方面の言語を使用する、といった研究がインターネット上で公開されているので、ここにウェブサイトを紹介しておくにとどめたい。

(<http://www.dai3gen.net/epage7b.htm>)

(http://www.absoluteastronomy.com/encyclopedia/a/altaic_languages.htm)

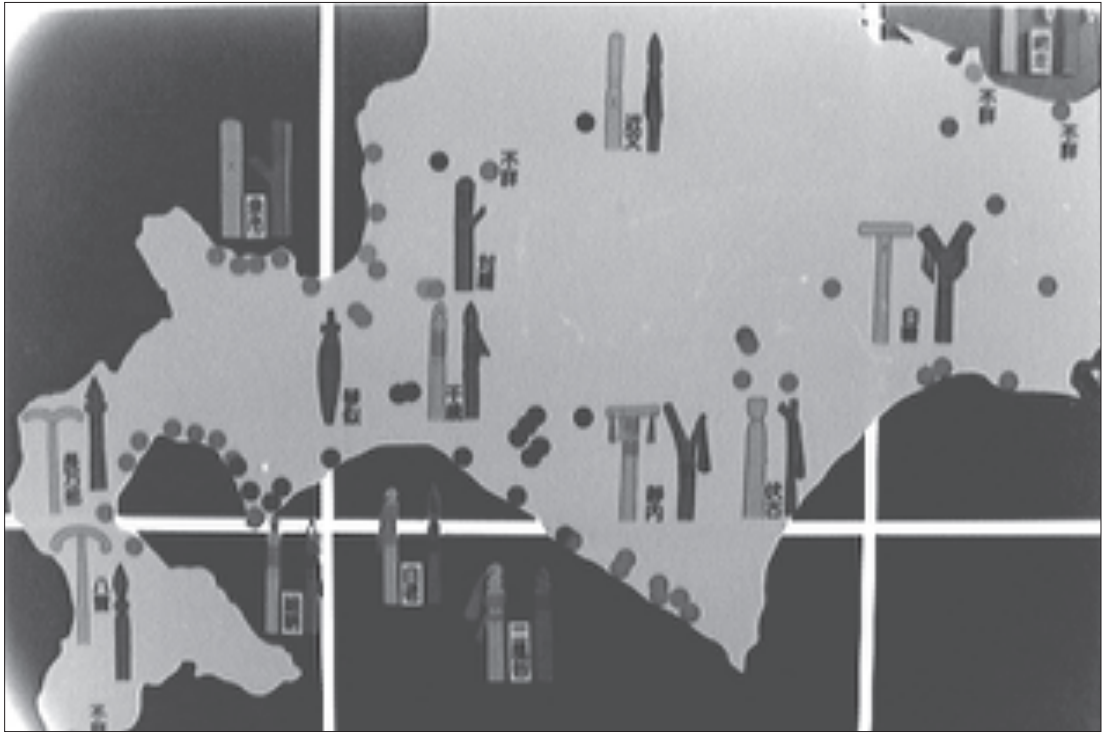
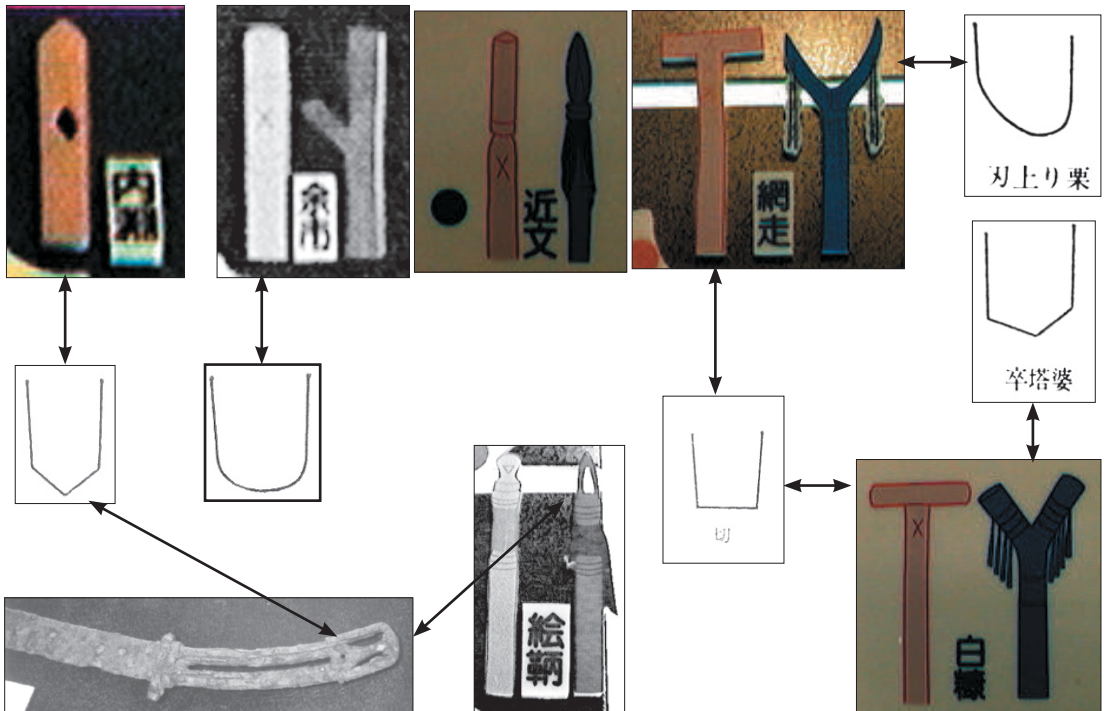
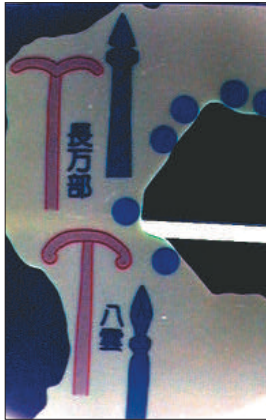


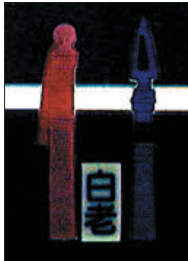
図 2-1. 北海道のアイヌグループと墓標（ウタリ協会展示より転載）

図 2-2. アイヌの墓標（男・女）と日本刀の茎尻の形比較



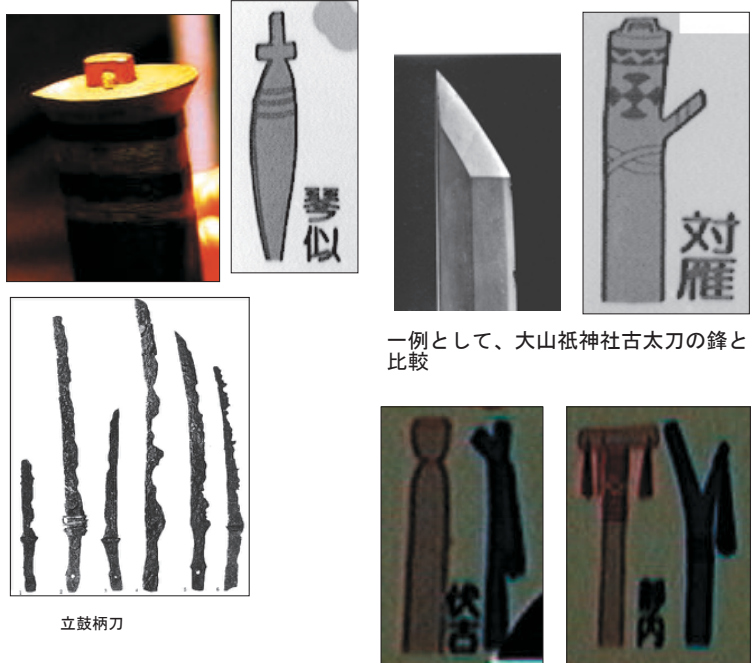


青森・秋田出土骸手刀



アイヌの墓標
右：男性
左：女性

図 2-3. アイヌの墓標（男・女）と日本刀の茎尻及び切先の形比較



一例として、大山祇神社古太刀の鋒と比較

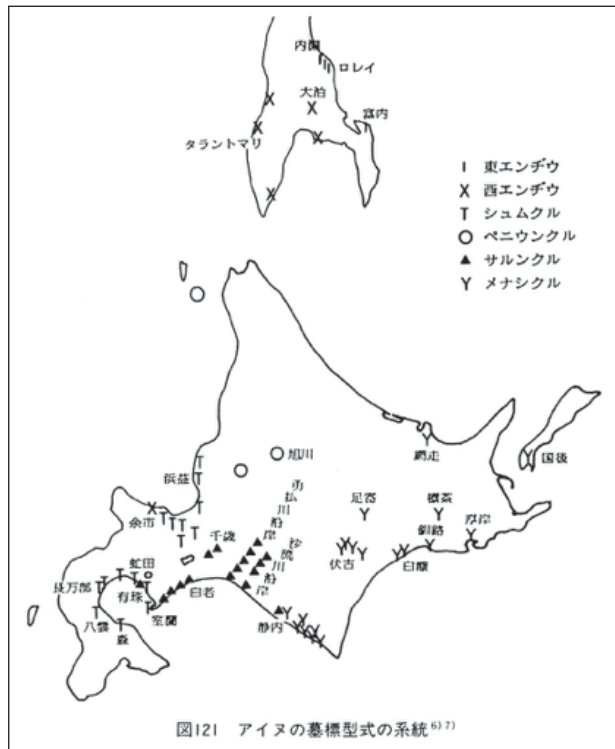


図121 アイヌの墓標型式の系統^(6) 7)

図 2-4. アイヌの墓標形式の系統（宇田川洋氏著書より転載）

三、「刀」を「ナタ」と読む北方文化

「カタナ」(刀)の語源は、「片刃」(カタハ)からの転化であると言われている。しかし、『中国兵器史稿』の中に蒙古の両刃の短剣が「カタラ」と中国表記されていることから、

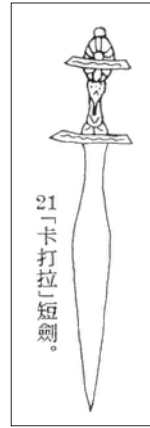


図 3-1. カタラ

もしかしたら、カタラからの転化ではないかとの疑念をもったのは、十数年前の事である。

日本の古流武術である香取神道流の中には、長刀(なぎなた)術、薙刀(なぎなた)の名称が並記され、「刀」を「ナタ」と呼んでいるので、最初に「ナタ」の語源を調査することにした。日本在住の中国の武術関係者に尋ね歩いたが誰も判らず、一九九六年、シルクロードを訪ねてみる事にした。

北京から西安(嘗ての長安)まで飛行機で飛び、そこから五十二時間かけてシルクロードを汽車で柳園まで行き、バスで敦煌に着き敦煌博物館などを訪ねた。そこには素環頭である片切刃の直刀が展示され、三千年前のミイラなどを見学できたが、肝心の「カタナ」の語源に関連する言葉を見出すことはできなかった。敦煌は東西文化の交流地点であるばかりでなく、蒙古とチベット、インド等の南北文化を結ぶ要所でもある。中国の素環頭が西方から来た文化であることが、その時筆者には理解できなかった。

車で天山山脈を横断し更に新疆ウルムチまで行き、新疆ウイグル自治博物館や現地の人々の家で交流しながら西方民族文化について調べたが、どの民族にも「ナタ」に該当する言葉はなかつ

た。

日本に帰り北方に眼を向けることにした。アイヌ語辞典を引くと、そこに「ノタ」(刃)の言葉を見だし、「ナタ」の語源がアイヌ語であることに気づいた次第である。「刀」を「ナタ」と読むのは、北方文化であることがわかった。

四、「ツルギ」の語源

二〇〇二年にモスクワを訪ねた時、門人の紹介により武器のコレクターに面会するチャンスを得た。そこで『中国兵器史稿』記載の蒙古兵(タタル)の使う両刃の剣「カタラ」が、カフカス(カフカス)のテュルキーによって作られる事を知った。つまり、剣(つるぎ)はテュルキーが作るが故に「ツルギ」と呼ばれるようになったのであろう。「カタラ」の語源調査から思わぬ事に「ツルギ」の語源が判明した。

翌年モスクワを訪れた時、両刃の剣カタラを所有しているセルゲイ・セメンチュク氏は、自然な刃文が少し研いだ部分に出ている事を指摘した。確かに肉眼でははっきり見えた。写真撮影を門人に依頼したが、刃文はよく写っていないかった。(このようなどという事を、後日スウェーデンの刀鍛冶



図 4-1. チュルキーが作ったカタラ。自然な刃文が出ている(モスクワのコレクター所蔵)

が教えてくれた。)

それから筆者はモスクワから夜行列車に乗り、サンクトペテルブルグに移った。エルミタージュ博物館を訪ねた後、トウバ共和国出身のテュルキーのマカシェフ氏と、シャーマンの家

系のジュレミー氏にインタビューした。

テュルキーのマカシエフ氏の説明から、アルタイのテュルキーが優れた技術を所有していたことが判ったが、その技術は、カフカスのテュルキーから来たものである事を知らされた。

五、「カタナ」の語源は「KATALカタル」である

二〇〇五年八月、モスクワからカフカス山脈に入ることになった。そこはチェチェンから七十キロしか離れていないため、テロに遭遇する危険があった。しかし、筆者のの興味は止められなかった。幸いな事に、地元の合気道の門人が全てを準備してくれた。ダマスカス刀の鍛冶屋、カフカス考古学研究所のピアセラン氏と研究者たちの現地案内と発掘品、ナルチック国立博物館長との面会、アーリヤンの研究者ユーリ氏、そして日本語とカラチャイバルカリア語の関係を研究したナジズ・ブダエフ氏などに面会する事が出来、念願のエルブルース山の四五〇〇メートル地点に立つこともできた。

エルブルース山周辺には、現在ロシア連邦に属する二つの国と、分離独立したグルジア共和国が存在している。そこには紀元前七〇〇〇年からアーリヤンが住み、その後衛のカバルダイニアン、バルカリアン民族が今も住んでいる。嘗てはスキタイを育み、紀元前三千年期の円墳、スキタイの古墳があった。その山麓に住む人たちの文化の中に、日本の古代文化の起源が見いだす事ができた。バルカリアンが今も住んでいる古い家が立つ地域には、嘗てシュメル語が残され、ギリシヤ文化もあったという。まさに驚きの連続であった。そして、遂に「カタナ」

という言葉が、カラチャイバルカル語の中にあることが判明した。

ナジズ・ブダエフ氏の研究著書の中にはつきりと、①日本語カタナ(ロシア語表記)②かたな③刀④カラチャイバルカル語⑤кaтaп⑥カタル、⑤меч⑥メチェ⑦刀と明記されていた。英語表記では「KATAL」で、「L」は強く発音される。

バルカリアンであるピアセラン氏によると、「カタル」は刀剣の総称であるという。そうすると、脇差し程度の長さの刀剣とは限らないことになる。長さも種類も非常に多い



図5-1. 発掘出土鉄製刀剣(上)、青銅製矛槍類(下)

鋒両刃鑄造シャシュワ（軍刀）（7世紀）



図 5-2. 鋒両刃造り弯刀全身（カフカス考古学研究所発掘出土品）

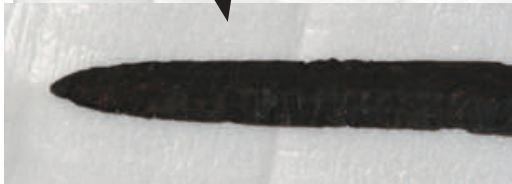


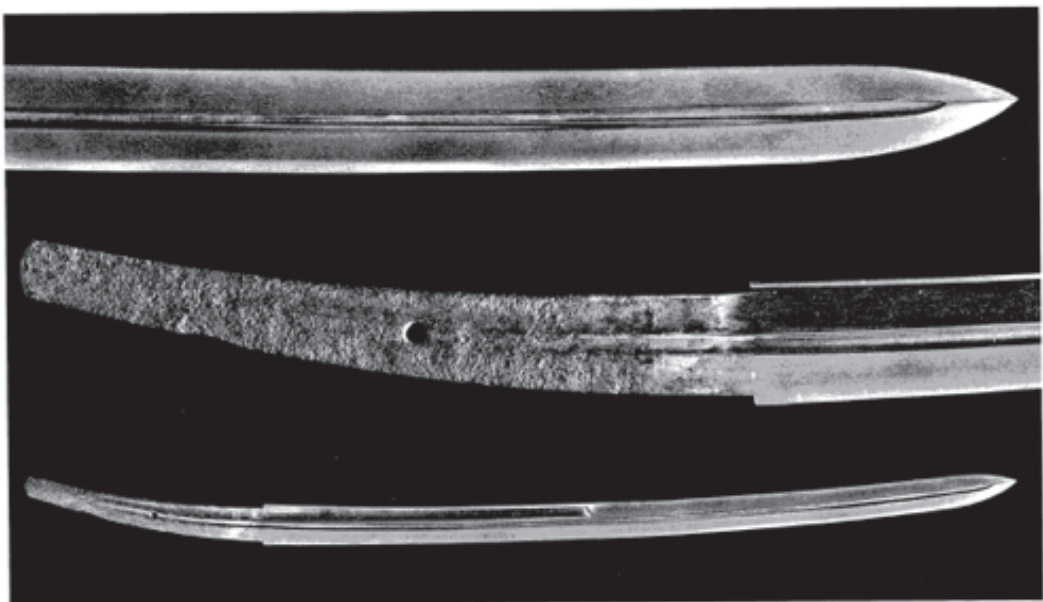
図 5-3. (上) 鋒部分（拡大）



図 5-4. (右) 柄部部分（拡大）

鋒両刃鑄造太刀：小烏丸（御物）（10世紀）

図 5-5. 10世紀作。姿形に日本の独自性が見られるところから、国内で作られたと思われる。筆者は日本国内での南北両文化が結合した結果として捉えている。この弯刀は、大和伝の源として一般的に見られている。



ので、「カタル」が必要となったのであろう。日本でも同じように「カタナ」といえば刀剣全てを意味するように。

六、「カタル」と「シャシュワ」(サシュワル)

ロシアの刀剣は二種類に分かれる。一つは「サブレ」(軍刀)で、もう一つは「シャツカ」(長い刀、弯刀)であるが、この名称はバルカリアンの名称に由来している。バルカリアン語では軍刀を「シャシュワ」、両刃(多分鋒両刃造り)の長刀を「カタル」という。英語の「サーベル」もここからきている。アメリカで出会ったアーリヤンは、「シャシュワ」は「サシュワル」だと教えてくれた。言葉はいろいろ変化することがよく判る。

カフカス考古学研究所には、発掘した七世紀に造られた鋒両刃造り弯刀(鋒部分)シャシュワや、青銅の両刃の剣カタルなど、多数所蔵されている。しかし、「Katal」(カタル、カタラ)は、日本と同様に刀剣の代名詞となっている。

七世紀のサブレは鋒両刃部分だけがやや弯曲し、その他は直である。このサブレを考察すると、鑄造りは結局、鋒両刃の中央線が片刃の刀身に延長することによりできた形式である、と認められる。従ってサブレは、当初「直」であった。ロシアで開催された刀剣展の図録によると、ロシアの弯刀は八世紀に始まり、十世紀に完成している。藏手刀を含めて弯曲の年代を考えると、日本とロシアはほぼ同年代になるのではないだろうか。

モスクワのクレムリン博物館によると、弯刀をロシアに持ち込んだのはタタルであるという。コザック兵にはタタル兵も含まれるので、バルカリアン刀がタタルによって日本に

伝わった可能性も多いと考えられる。

「サブレ」は軍刀を意味し、主として馬上対馬上戦に用いられ、日本の太刀に相当する。これはサーベルと呼ばれて世界に普及した。「カタラ(短剣)」は直剣で、楯を使った歩行対歩行戦に用いられ、日本の脇差しに相当する。シャツカは弯刀で、

馬上戦にも歩行戦にも使われる便利な刀剣なので、次第に主流となった。したがって戦闘プロ集団コザック兵も用いたのであろう。

日本刀が発達した背景には、このように戦闘様式の変化と防具の発達などが総合的に勘案され決定された。日本は諸外国と無関係ではないので、外国の情報をいち早く取り入れ、即応していったと考えられる。

カフカス考古学研究所の発掘品の槍は、袋状の茎の付いた穂先などもあった(図9-1)。これも日本と同様に発達している。

シャツカ(弯刀)の刀鍛冶は、近年まで生きていたそうだが、しかし、残念なことに今は作る人が絶えてしまったという。

「カタラ」の名称は、刀剣の総称として用いられるが、日本では最近、打刀(弯刀)だけを意味するようになってきた。しかし、弯刀は時代の流行の一つと捉えるべきである。弯刀が主流になったからといって、日本で直刀が全く作られなくなった訳ではない。需要があれば再開されるだろう。



図 6-1. 青銅及び鉄製袋槍

カフカスの武士と武具、家紋

(Nalchik National Museum of Kabardino-Barkalii)



図 6-2.
(左) サシュウル(サブレ)
(八世紀)
全長 1.40m、重量 700g

図 6-1. パルカリアンの武士。パルカリアンの王家と関係のあったクニヤース (Kniyaz) 家のシンボル (家紋) が馬に刻印されている。パルカリアンは伝統的に武士道をもっている。



図 6-3. (下)カバルディニアンとパルカリアンの家紋の数々 (筆者のビデオテープより写真作成)



図 6-5. アキナケス型直剣カタル (6世紀)

ОБРАЗЦЫ ТАМГОВЫХ ЗНАКОВ
КАБАРДИНСКИХ И БАЛКАРСКИХ КНЯЖЕСКИХ ФАМИЛИЙ

Атакукинской фамилии	Кайтукинской фамилии	Кучюкеева	Бат
У Атакукина	О Аларова	Т Даутюкеева	Три
Х Кара Куденцова	М Коголкина	Л Трыкеев	Бед
С Тухтамышева	Н Кожюкова	П Жерметеева	Балкарск
К Дышекова	О Донокова	Л Вудд Таманев	У Айд
О Ладничева	Л Шипеева	Т Кучмазурин	Х Шан
А Думанова	Л Паукинда	Таутукинской фамилии	М Уруй
А Кармова	А Шаулова	Бекенов Чернышова	Ш Мис
А Ашоева	М Суртан (хан)	А Авет	Ф Шан
А Тенкешова	Мисостовской фамилии	Х Астаурова	Жант
А Агуленова	и накурической фамилии	Х Халдиев	А Аден
А Бакухова	З Наурутова и Ринсеева	И Исламов	Сарет
А Кочова	Э Жанагова	И Исраилов	Сунт
А Арунова	А Шарданова	М Муртоева	Балмар
			Колма



図 6-4. (下) 直剣 (サシュウル) と鏃

☉	Тамга на можовой стене на Енисее
☉ ⊕	
⊕	Тамги изображённые на ландах тюрков V-VI в.
⊕	(Терсеи, Аятай, Тува, Ямасыя.)
⊕ ⊗ ⊕	Средневековые тамги из эпитафий Тувы
⊕ ⊕	Наскальные тамги Южной Сибири
♀ † † Ω X ☉	Средневековые тамги Аятая
♠ ♠ ♠ ♠ ♠	Тамги на монетах Волжской Болгарии
⊗ ⊗ ⊗ ⊗	Тамги Тонмак-Ная <small>(Урочище на территории селения Башаров С.Я. стр. 228)</small>
○ ○ ○ IX Π + Ω λ >	Тамги казахов
☉ ☉ ☉ II V ∞ Q Э X	
7 1 5 Z II ∞	Тамги киргизов.
± 6 V γ + ♀ †	
× H M Π Y II ♠ ♠ ♠ V + ≡ ♠	Тамги крымских татар
○○ ⊕ ○ ○ ○ ○ ♠ ♠ ♠ ♠ ♠ ♠ ♠ ♠	
♠ → ♠ ♠ ♠ ♠ ♠	Золотоордынские тамги
♠ ≡ ♠ ♠ ♠ ♠	
II ○ ♠ ♠ ♠ ⊗ ♠ 2 > + > H □	Родовые
Ш Y T J Δ X T ⊖ M + 7 f III	тамги
☉ ☉ ☉ ⊗ ⊗ ⊗ I A Z	ногайцев
☉ ☉ ☉ ○ ○ ⊗ ⊗ ⊗ ⊗ ⊗ ⊗ ⊗ ⊗ ⊗ ⊗ ⊗ ⊗	Тамги карачаевцев
♠ ♠ ♠ ♠ ♠ ♠ ♠ ♠ ♠ ♠ ♠ ♠ ♠ ♠ ♠ ♠ ♠ ♠ ♠ ♠	

图 6-6. いろいろな民族の家紋

七、縄文中期の言語はチュルキ語か

日本では縄文時代は約一万年前から始まっているので、言語はかなり変化した可能性があり、必ずしもウラル・アルタイ諸語だけだったとは考えられず、中央ユーラシアのテュルク語やカラチャイバルカル語、南方系の言語などが使用されていたと考えられる。

カフカスの入り口であるナルチック市に住むナジズ・ブダエフ氏によると、紀元前三千年頃のカフカス地方の共通言語はテュルク語（トルコ語とは違う）であったという。カフカスのエルブルース山麓には、テュルク語から分離したカラチャイバルカル語の中に、日本語に共通する言語が五百ほど残っていた。嘗ては五百のシュメール語（シュメリアン。古代バビロニアの南部地方；世界最古の文化がおこった）も残っていたとピアセラン氏が話してくれた。

ロシア語の原文で書かれたナジズ・ブダエフ (Naziz Buddaev) 氏の著書 “West Turky in Eastern Country” (Published by Nalchik, 2002) は、〈カラチャイバルカル語と日本語の関連性〉について詳細に研究されているので、イルヤ・ソロニテイン、ハナミ・タヤ夫妻の協力の許に筆者が日本語に翻訳し、この論文の最後に掲載する。言語学者の更なる研究に供したい。

八、ロシア側からカフカス山脈に入る

二〇〇五年八月二十三日、筆者と門人のイルヤ・ソロニツイン氏、タヤ夫妻は、モスクワのドモジエドボ空港からシベリア航空で2時間、カフカスのミネラルウォーター空港についた。

この一帯はスキタイが千年前まで住んでいたことが知られている。現在はカバルディニアナーバルカリア共和国でロシア領である。

出迎えてくれたのは、地元の研究者ユージン・カラマノフ氏、ユーリ・セルゲーエフ氏など数名であった。ユージン氏の車に分乗し、ナルチック市へと向かった。約百三十キロのドライブである。

エルブルースに行くには、ナルチックから更にバクサン渓谷に入り、約百五十キロ^キ 走行しなければならない。バクサン渓谷の入り口はバクサン入口といい、東西にバクサンが広がっている。例えばハイ・バクサンなどといった高地のバクサンがある。渓谷はもう一つあり、チェゲム渓谷という。そこにはバルカリアンの古い住居が残っている。バクサン渓谷を走行中ユーリ氏はアーリヤンの住んでいた場所を説明してくれた。バクサン渓谷を走行中、馬、牛、羊などが道路の真ん中を多数往来しているので、度々停車しなければならなかった。ここでは牛馬優先である。

ところで、我々がもし、シルクロードを通ってエルブルースへ行くとしたら、とても一週間の旅行では無理であった。エルブルースはカフカス山脈のロシア側入り口に位置しているからだ。

九、エルブルースを取り巻く三国

(一) カバルディニアナーバルカリア

アーリヤンの子孫が、約七千人ほどで少数民族国家を形成している。現在はロシア連邦に属す。エルブルースの麓のバル



図 8-1. カスピ海と黒海に挟まれたコーカサス山脈（全長 1000 キロ）

図 8-2. ミネラルウォーター空港からエルブルースまでの道程

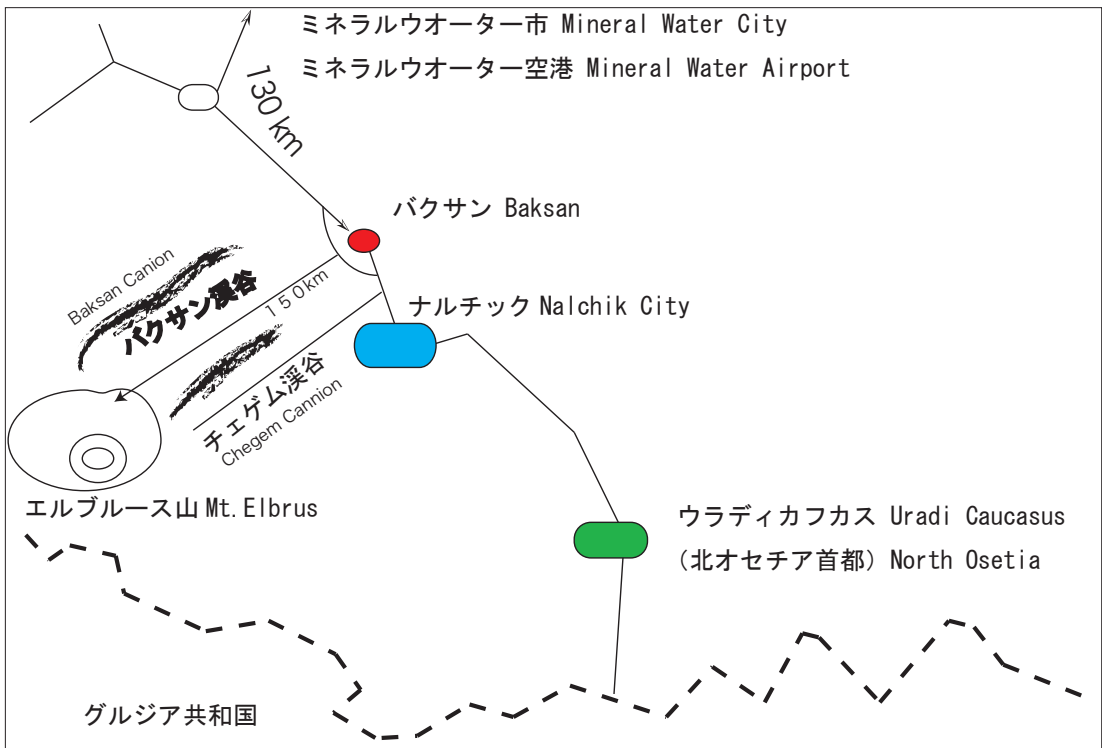




図 8-3. エルブルースの 4 5 0 0 峰付近から見た北オセチア共和国とグルジア方面の山並み。1 0 0 0 万年前にできた若い山なので、風化されず突起した険しい峰が続く



図 8-4. エルブルース 4 5 0 0 峰付近で頂上を背景に撮影。足下は万年雪

カリアンを、ここでは「タオウー」と呼ぶ。その意味は「山からきた人」である。

(二) カラチャイーチエルケシア
カバルディニアールカル国とカラチャイチエルケシア両

国の言語が、文末に紹介するカラチャイバルカル語である。アーリヤンの子孫と見られているが、人口や文化などについては不明。

(三) グルジア (ジョージア) 共和国

近年、ロシア連邦から分離独立した。ヒッタイトよりも古い、世界最古の鉄器がグルジア共和国に存在するという。この情報は既に本誌で発表したとおりハフタイシユビリ博士の説であるが、筆者は現物を見たわけではない。しかし、アーリヤンの直系子孫であれば、その可能性は非常に高い。

十、世界三大聖地の一つエルブルース

(二〇〇〇年周期の活火山)

西ヨーロッパの最高峰エルブルースは、黒海とカスピ海に挟まれた全長千キロのカフカス山脈の入口に存在する。標高は五六三三メートルであるが、年々縮小していると言われている。エルブルースは、千年周期の活火山である。エルブルースに到達する道は、グルジア共和国側とロシアのナルチック側があり、ナルチック側からの入り口をバクサンといい、ここからバクサン渓谷がエルブルースまで一五〇キロ続く。これと並行して存在するもう一つの渓谷をチェゲム渓谷といい、高さ千以上の絶壁の難所がある。バクサン渓谷の中には小さなイリツク渓谷があり、エルブルースから流れた水が、イリツク川となって白い流れを見せている。

エルブルースの意味は幾つかあるようだ。一つは「安楽の場所 (Big Rest)」である。イスラム教の人たちは「アラア」が眠

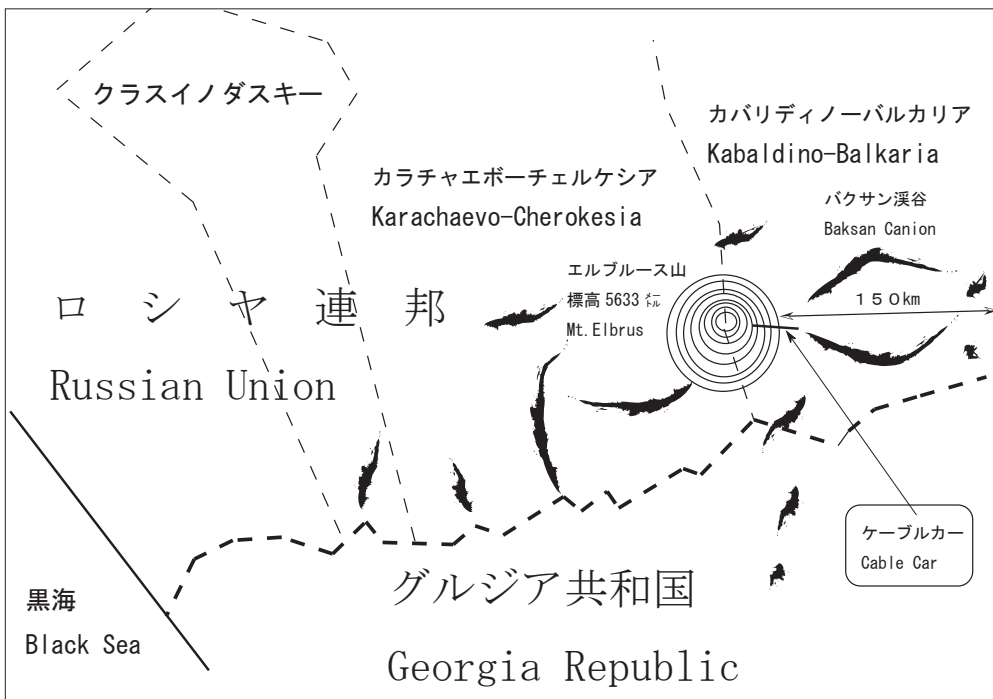


図 9-1. エルブルースを関わる三国の位置関係



図 10-1. 4,500 年から頂上を仰ぐ。



図 10-2. カバルディノーバルカリア地図



図 10-4. 鉄分を多量に含んだイリック川

中国の西域にあるウルムチ自治区から見ると、エルブールスは、

る山」と信じている。山は信仰の対象となっていて、キリスト教も人もイスラム教の人も祈る。エルブールスは、チベットのチオモランマ、エベレストのヒマラヤと並ぶ世界三大聖地の一つとなっている。

登山者は、特別なエネルギーを感じた場所をその人の祈りの場所とする。バルカリアンの宗教は、日本の神道によく似ている。



図 10-3. 四千^元から四千五百^元にロープウェイで登る筆者。下に赤鉄鉱などが見える。

シルクロードの最終地点にあたる。しかし、ここまで取材したシルクロードを題材にしたテレビ番組などは、今まで見た事が無い。大体途中で諦めてしまう。それは、カスピ海が彼らの取材を中断させるからかもしれない。また鉄の起源の探索も、ヒッタイト（ペルシヤ、現在のイラン、トルコ）辺りで終わってしまい、グルジアやエルブールスに至っていないのが現状である。グルジアには、ヒッタイトより古い鉄があると言われているが、まだ手つかずの状態である。

エルブールスは、シルクロードと草原ルートが交わる地点と考えるとよいだろう。

十一、アーリヤンの誕生と日本のイザナギ、イザナミ

アーリヤンがどこから来た民族なのか、エルブールス住民や研究者は誰も知らない。子孫であるカバルディニアンの頭骨が後ろに長く伸びているのがナルチック国立博物館の説明で判ったが、しかし、全てのカバルディニアンの頭骨がそうではなかった。地元に住むユージン氏もこの事を知らなかったし、今までそのような人間を見たことが無かったそうだ。きつとこのような頭骨をもつ人は、王になるべき特殊な人間であったかもしれない。

一週間後、筆者がモスクワでテレビを見ている時、エジプトの第十八王朝末期のツタンカーメン王 (B. C. 1361 ~ 1352) パラオの黄金マスクを取り除き、死者の頭部をエックス線で投射する画面があった。その画面に現れたパラオの頭骨は、宇宙

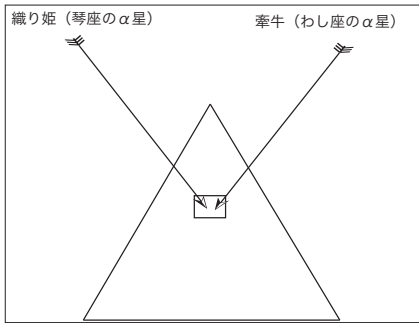


図 11-2. ピラミッドに光を取り込む想像図
(筆者作成)

何故、このような頭骨を持つ人が王となるのだろうか。これは筆者の推測であるが、天の川を挟んで対座する織り姫（琴座のα星ヴェガ、北天）と彥星（牽牛星、わし座のα星アルタイル、南天）がつかの間の逢瀬となる七夕の時期に、二つの星から放たれる光をピラミッドの中央の一室に導き入れ、そこで王と王妃が結ばれる（図11-2）。その結果、星の王子が生まれるという伝説的な光景を思い浮かべるのである。つまり、頭骨の長い人は星の王子として生まれた特別身分の高い人、またはその後継者であったと考えられる。

図11-1 カバルディニアン（上）と頭部（下）



人を思い浮かべせるほど後方に伸び、非常に奇怪な形をしており、それは将にカバルディニアンの頭部だった。パラオ（又はファラオ）は、太陽を意味する。

何故、このような頭骨を持つ人が王となるのだろうか。

コンピューターによって地球の歳差運動（図11-3）を約四千年前のパラオの時代に角度修正すると、丁度二つの星の光をピラミッドに取り入れるようになっていたことは、アメリカの研究者によって既に確認されている。この二つの星の交わりが日本のイザナギ、イザナミ神話に通じ、ここから更に多くの神を産む日本神話が誕生したと推考される。ファラオは、天孫降臨説を裏付けるものとなるだろう。

歳差運動とは地球の首振り運動のことで、二万六千年周期で大きく一周する。大きく振れるのは北極星とヴェガの間なので、半分の一万三千年に一度ヴェガは北極星の位置に入れ替わることになる。ピラミッドには、彥星と織り姫の光を中央の部屋に取り込む通路が設定されている。このような必要性から、円墳はしっかりと石積みピラミッドに変わったものと推考される。

アラビア地方の羊飼いが、天の黄道十二宮の存在を早くから知っていた事は、教科書などにも書かれている。天の黄道十二宮とは、太陽が一年かかって天球を一周する時の通り道である。地球から見ると、十二の星座の中に毎月太陽が入るように見える。その順序は春分点から順に、うお、おひつじ、おうし、ふたご、かに、しし、おとめ、てんびん、さそり、いて、やぎ、みずがめ座である（図参照）。近年発掘された高松塚古墳の天井にも描かれているので、古墳を築造した人はこの事を知った上で、一つの星として古墳を作ったので、その位置関係は重要な意味をもつはず。

十二、移動民族

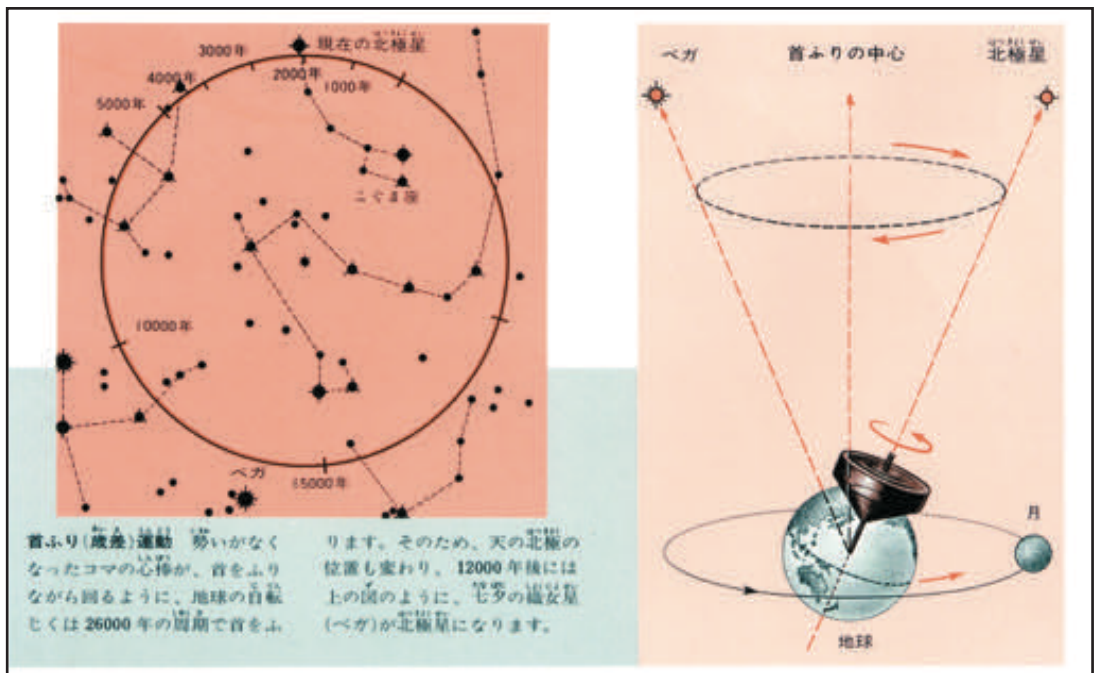


図 11-3. 歳差運動 (小学館発行『宇宙一星と観測』より転載)

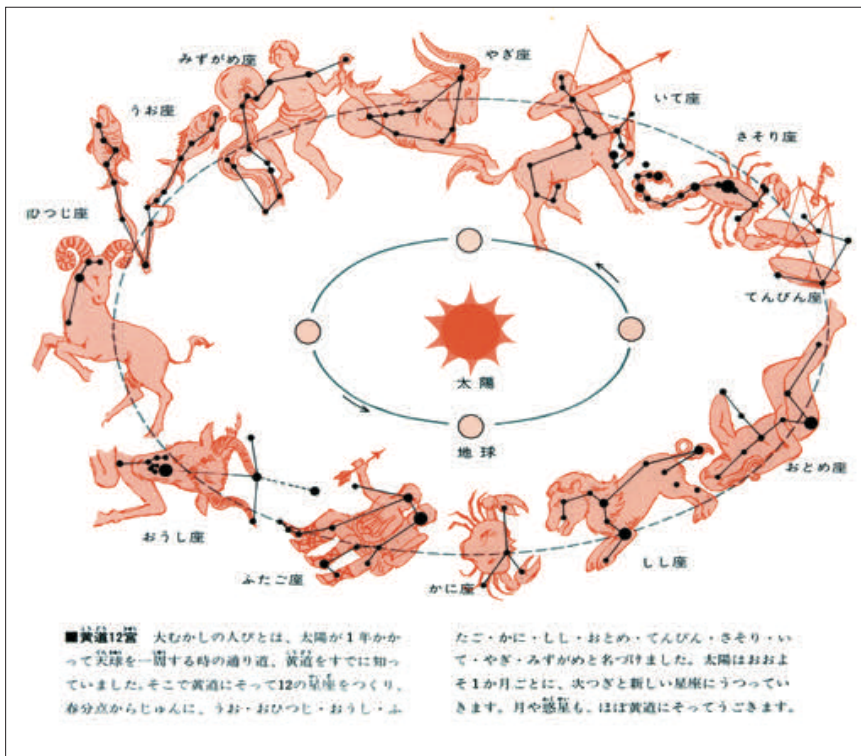


図 12-1 天の黄道十二宮 (小学館発行『宇宙一星と観測』より転載)

アーリヤン

紀元前七千年頃からエルブルース山麓にはアーリヤンが住むようになり、イロンという国を築いた。ここから移動したアー



図 12-1. アーリアンの移動：(『世界史地図』吉川弘文館刊 1982) より転載

リヤンは次第に多くの民族に枝分かれしていった(ユーラ氏)。アルタイ方面、アメリカ大陸方面、蒙古、日本、ペルシア、ギリシヤ、ローマ、インド、更にドイツへと移動していった。

紀元前二〇〇〇年期のアーリアンの移動経路について、日本で発行されている世界史地図(吉川弘文館刊、一九八二)は、カスピ海上方地域を始源として移動していることを示している(図43)。この図には日本への流れは無く、①北西方向(モスクワ方向)、②カフカス、ヒッタイト方向、③カルパチア、ギリシヤ、地中海、フェニキア、エチプト方向、④カスピ海北方、メソポタミア方向、⑤イラン、モヘンジョダロ、ヒマラヤ方向などが描かれている。

いずれにしても、アーリアンの移動は広大である。移動の過程で起きる混血が、多くの民族を派生していったのである。しかし、アーリアンを一般的にはジプシーとは言わない。

ジプシーとローマーノ

ジプシーとは、エジプトを通った移動民族だけを指すのが正しい。スペインの人類学者ファウスチーノ氏によると、移動民族はアルタイから移動を始め、スペインに移動する過程でエジプトを通る経路(ジプシー)とローマを通る経路(ローマーノ)の二つに分かれたという。ペルシヤ、ルーマニア、ローマを経由してスペインに至る人たをローマーノといい、エジプトを通過してスペインに至る人をジプシーというわけだ。ファウスチーノ氏によると、ローマーノは太陽の事を「カム」といい、ジプシーは「オカム」というそうである。この「カム」は、バルカリアンの「カム」(神)と共通している。太陽を神として崇拜するのは、日本神道と同じである。アーリアンもジプシーと

同様の移動民族であつただろう。ジプシーは純金だけを身につけ、馬蹄には蹄鉄を用いた。この鉄を鍛冶する時のリズムは、タン・タン・タン、タン・タン・タンというシヤマニズムのリズムで鍛錬される、とフアウスチーノ氏は語つた。

平凡社発行の『ジプシー』によると、国境を通過する際、彼らは巡礼者として振る舞つていた。それでスペインなどでは施しを受け厚遇された。しかし、通過に税を課す国、迫害を加える国、捉えて奴隷にする国、軍隊に入れる国、追放する国等さまざまであつた。

ジプシーのグループの長はシャーマンと見られていたが、国境を通過する時には、国王に謁見して通過許可証を得る際、公爵など身分の高い肩書きを用いた。そして、不思議にもどこの国でも言葉が通じた事である。グループは単に放浪する大道芸人集団ではなく、グループよつては生活部、農耕部、軍団、楽団など、手分けしてグループを支えた。

当初、乞食業を認めていたキリスト教も次第に受容しなくなり、イギリスの『放浪者禁止法』等々、十五世紀あたりからヨーロッパから次第に追放されるようになった。特に追放を厳しくしたのはフランス、ドイツであつた。それでも、彼らを完全に除外した国はなかつた。

現在のジプシーの人口は、次のように推計されている。

① ルーマニア（二〇〇万人）、② ブルガリア（五〇万人）、③ 独立国家共同体（ロシア、ウクライナ、その他）、スペイン、スロヴァキア、セルビア・モンテネグロ（二五万人）、④ マケドニア、チェコ、フランス、ギリシャ（一〇万人）、⑤ イタリア、ドイツ、イギリス、アルバニア（五万人）、⑥ ポーランド、ポルトガル、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ（二万五千人）、⑦ ク

ロアチア、オーストリア、（一万人）、⑧ スウェーデン、スロヴェニア、フィンランド、オランダ、ベルギー、スイス、リトアニア、デンマーク、エストニア、ラトヴィア（千人以上）、⑨ アイランド、キプロス、ノルウェー、ルクセンブルグ（千人以下）となつている。

しかし、私がフィリピン人から聞いた話では、多数のジプシーが今でもフィリピン国内を移動しているという。日本でも、大勢の人が自由に入出入りしているように思われてならない。彼らの移動を止める事は、不可能に近いからだ。

アマシ（エムシ）

アメリカの約十州（ペンシルベニア、オハイオ、ウィスコンシン、インディアナ、ミネソタ、アイオワ、ニューヨーク州など）に暮らすアマシ（エムシ）は、ヨーロッパから移動した人たちである。恐らく追放され、船で海を渡ってきた人たちであろう。

筆者がウイスコンシン州在住のアミシに直接聞いた話では、「ドイツからきた」ことは確かだが、「いつ来たか判らない。古い古い昔である」ということだつた。彼らは現在でもアメリカに帰化していないばかりでなく、電気、電話、車等一切近代文明を受けつけずに生活している。彼らは経験なクリスチャンで、カトリックにもプロテスタントにも属さないキリスト教のバイブルを持つている。アメリカでは、三〇〇年前にアメリカ大陸に移住してきたことになつている。そして「アマシ」の名称は、三〇〇年前スイスでキリスト教の自然回帰運動を提唱したスイス人「アマシ」の名前に由来しているという事になつている。しかし、そんな理論はとても信じられないし、アメリカ

の研究者の一方的な定義ではないだろうか。彼らは決して記録を残すことはないのだから。

アミシとエムシを同一に見るべきか

筆者の想像では、彼らは日本にもやってきたはずで、迫害を受けた(鉄文化をもった)エムシではないかと考える。しかし、こちらの研究は全くなされていないので、手がかりが得られない。

鉄の文化についてアミシに聞いたところによると、「鉄はおじいさんの代まで自分たちで作り、(馬)蹄やワゴン車の車輪を覆う部分に用いていた」そうだ。製鉄文化を移動民族が持っていた事は、想像どおりであった。彼らは迫害を恐れ、決して人前に出る事を嫌い、人名を出す事や写真をとられることを極度に嫌う。ウイスコンシン州マディソンで、買い物をし終わったアミシを同行したスペイン人がみつけ、「アミシだ」と私に教えてくれるまで全く気づかなかつた。ジブシーに詳しいスペイン人は、アミシのことをよく覚えていた。

男性は黒い服と黒い帽子をかぶり、女性は昔のヨーロッパ風に長いドレスをまとい、白いフレアのついた帽子をすっぽり頭に被っていた。筆者は彼らの部落を訪問すると、手作業によるカーペットを編み、酪農でチーズを作り販売していた。近くには広いコーン畑があった。彼らだけの小さな学校が家の側に建っていた。生活に要する水は、高い塔に取り付けた風車で井戸水をくみ上げているようだった。

アメリカでは、現在アミシは一定地域に定住しており、結婚適齢期になるとグループの長が他のグループの長と連絡し、結婚相手を決めるとのことであった。少数民族の近親結婚を回

避する長い間の風習が、今も続いていることが判った。

アイヌとエムシ

アイヌとエムシは、移動民族であっただろう。自然を崇拝する信仰心も、多分同様だと思われる。筆者はまだ本州アイヌに付いて調査していないので、はっきりしたことは申し上げられない。

筆者が白老でアイヌの人たちに尋ねたところによると、彼らの信仰する神は十三神だという。祈りを捧げた後に十三本の枝を大地に立てた。白老アイヌ博物館内部の説明では、太陽、海、山、舟、川、木、家、火、熊、鹿、鶴などが描かれている。空の神は鶴、陸の神は熊、海の神はシャケ、沖の神はシャチというように、動物が神を表すのである。

これらの動物の霊を自然に帰すのを「イヨマンテ」といい、物の霊を返すのを「イワクテ」という。従って、古い物をそのまま保存する習慣はないし、文字による記録も残さない。これはアメリカのエミシと同様である。

「イヨマンテ」は熊祭りとして有名で、熊の霊をあのに返すのだと云われている。この熊祭りは、「熊の霊を大熊座に返す事」だと筆者は理解している。つまり、アイヌ思想の中にギリシャ神話、もしくはアフリカン思想、シャーマニズムなどが混在しているのである。この思想が全ての物に当てはめられ、「イワクテ」思想につながっているのではないか。ギリシャ神話よりも古い伝承かもしれない。アイヌ民族はウラル・アルタイ辺りでアフリカン思想とつながっている可能性がある。したがって、移動民族である。

アイヌのグループは、川のアイヌ、山のアイヌ、海のアイヌ、

林のアイヌなど生業によってグループ別される。このような状況は、フィンランド北方のラップランドに住む現地人ラップ・アイゼットも同様である。凡そ七グループ（山、林、川、海など）に分かれていたと記憶している。そういうことから、ラップランドと北海道の白老は姉妹都市関係になっている。

カナダのビクトリア島のカウチン族は、北海道のアイヌと同様に梟、シヤチ、熊、シヤーマンをトーテムポールに刻む。アイヌの人たちがビクトリア島を訪問し、自分たちと同じ文化を持っている事を確認した、とカウチン族の人は筆者に語った。アイヌの長老は、やはりシヤーマンなのであろう。

民族は生業によってグループ化し、他のグループとの血縁関係が必要とする。近親結婚を防ぐために、どうしても他民族の血を入れる必要があるからだ。このように考えると、北海道のアイヌと本州のエムシは異なるグループであるが血縁関係にあると考えるべきであらう。しかも、同じような自然崇拜の信仰心をもつことは、共通していると推理される。しかし、筆者はまだ本州アイヌの現状は、何も知らない。

十三、アーリヤン／カバルデイニアン／バルカリヤンの宗教と日本神道

(一) カム（神）

ガサン（月山）

「ガサン」はアーリヤンの信仰する神様で、「天国」を意味

するのだという。天国とは、多くの星座にイメージされた神々の集合世界をいうのである。これらの星座を、古墳によって地上絵のように点で描くことを「シヤンバラ」（地上天国）といい、シヤーマニズムの精神、あるいは仏教に伝搬した精神であると理解する。

シヤーマニズムに於けるの宇宙は、上天（天国）・中天（天座）、



図 13-1. インドの宇宙観

大地、それらを支える地中の柱によって構成される。上天を地上に描き、同じ精神を表すのがシヤンバラである。

カフカスの「ガサン」は、今は人名にも使われている。

私が「ガサン」という姓名の人をユージンに尋ねると、暫く考えた末、一緒に串焼きレストランに食事に行き、其所の主人を紹介してくれた。その背の低い主人がガサンという名前だった。彼は全く鉄とは関係がなかった。だが、嘗てカフカスにガサンという鍛冶屋が存在しても、それはあり得ない事ではなかった。このように考えてくると、「ガサン」という人は、アーリヤンが移動した先々に居て、かなりの数になると思われる。日本の「月山」は山岳宗教に関連し、人名、地名、刀匠などの名称になっているが、カフカスから来た概念であることが判る。

シャンバラIIアッサンバラIIタカマガハラ

ある著書によると、「シャンバラ」は「地下の国」で、ヒマラヤからアルタイまで地下道が続いている、とまことしやかに書いている。しかし、其所に一旦入ると戻ってきた人はいない。蒙古では、シャンバラを感じると人々は大地にひれ伏し、鳥もそれを感じてさえずる事を止めてしまうという。

それから想像すると、シャンバラは死んだ人の魂が行く「黄泉(よみ)」を意味しているようにも解釈される。これは仏教でいう冥土、幽界、靈界、あの世、極楽浄土である。シャーマニズム精神の仏教への伝搬である。

アルタイのシャーマンに尋ねたところ、「シャンバラ」は一つの精神で現実に存在するものではない、と教えてくれた。カフカのユーリ・セルゲーエフ氏によると、「シャンバラ」は「アッサンバラ」と発音するのが正しく、この語源は(ギリシャ神話の)「アスラ・マスダ (ASSURA MAZDA)」から来しているという。「アスラ・マスダ」はアリーの男性神で、『Great of World』(天国)を意味している。だから、シャンバラとガサンは、神々の住む「天国」(実は星座)ということになり、同一の意味をもつことがわかる。「ガサン」は上天にあり、「シャンバラ」は地下にあり、どちらも想像の世界である。しかし、地下ではなく、古墳が築かれる大地が正しいかもしれない。

なぜなら、日本神道の「タカマガハラ(高天原)」は「アッサンバラ」に由来していると考えられ、地上に点在する古墳は大きな星座を表わし、その星座は大地に描いた天国(アッサンバラ)である、と推定されるからである。個々の古墳は星座の中の一つの星であり、また小宇宙を示していると理解される。

この中に埋葬される人は、神格化された王(天皇) またその系統でなければならない。

シャンバラの事を通常「ウラー・アッサー」といい、これがアッシリアの語源となっている。

女性神ヒミキ(ハメキ)

ユーリ・セルゲーエフ氏によると、バルカリアンの女性神を「ヒミキ」といい、「風と戦いの神」である。「ハメキ」とも言うそうだ。

もし日本の「卑弥呼」(一説に姫子)に通ずるとすれば、『魏志倭人伝』に登場する邪馬台国の女王は、バルカリアンの女性神を名乗っていた事になる。卑弥呼は二世紀末の倭国大乱のあと王位につき、二四七年に亡くなるまで在位したと考えられているが、果たして実在の人物だったのだろうか。「卑弥呼」がもし人格神であれば、イザナギ、イザナミとの関係はどうなるのであるう。イザナギ、イザナミの二つの光により誕生するのは、王(男性、太陽神)でなければならぬと考えるのが一般的である。ピラミッド思想や日本の天皇制も同様である。しかし、日本の場合、女性天皇の時代もあったので、男性が誕生しない場合、女王も認められたのであろう。

(二) 中国に「ガサン」名はない

中国人に依頼しインターネットでサーチしていただいた結果、「中国にはガサン(月山)名はなく、ロシア連邦のタタール自治共和国に「カツ(オ十客山)」という地名がある」と

いう事が判った。つまり、ガサンが「カサン」という地名になっていることを示しているのではないだろうか。韓国には「月山里」という地名があると聞いている。日本では地名や刀工名になっていることは周知のとおりで、日本の「月山」は、カフカスからシルクロードを通って朝鮮半島に至り、そこから日本に入ってきたのであろう。

(三) 古墳（ロシア語でクルガン）：円墳

オカ

カバルディニアン地域の円墳「オカ」「ツキ」

写真のクルガンは起源前三千年に築造された円墳で、直径四五〇メートルある。やや小さい物は直径三五〇メートルで、二つが約1^キくらい離れて存在する。

写真のクルガンは、頂上部が盗掘され少し丸くなっているが、元は頂上突き出たであろうので、最初の計画では円錐三角形を予想して建てたことが考えられる。

カバルディニアールバル語の名称（ナジズ・ブダエフ氏の著書による）では、クルガンを「丘（おか）」と日本語同様に発音し、頂上部分を「築（つき）」という。この二つの名称は、古墳が二段構造になっていることを意味しているのかもしれない。日本の円墳は、頂上部が殆ど平坦になっているが、これは風化された結果であろうか。

クルガンの場所は現在カバルディニアン居住地になっているので、一般的にはカバルディニアンの築造物と見られるが、バルカリアンの可能性もあるということで、科学者同士が現在



図 13-2. (上) 紀元前 3000 年頃に作られた古墳（クルガン、丘、直径 450 ㍎）



図 13-3. (上) 紀元前 3000 年頃に作られた古墳 (クルガン、丘、直径 450 ㍎)。
 図 13-4. (下) ナルチック市近郊の古墳群 (サルマタイ期のスキタイ古墳を含む)。B. M. KELEFOV 氏の著書より抜粋。
 古墳群はシャンバラ (高天原) を意味するだろうか。

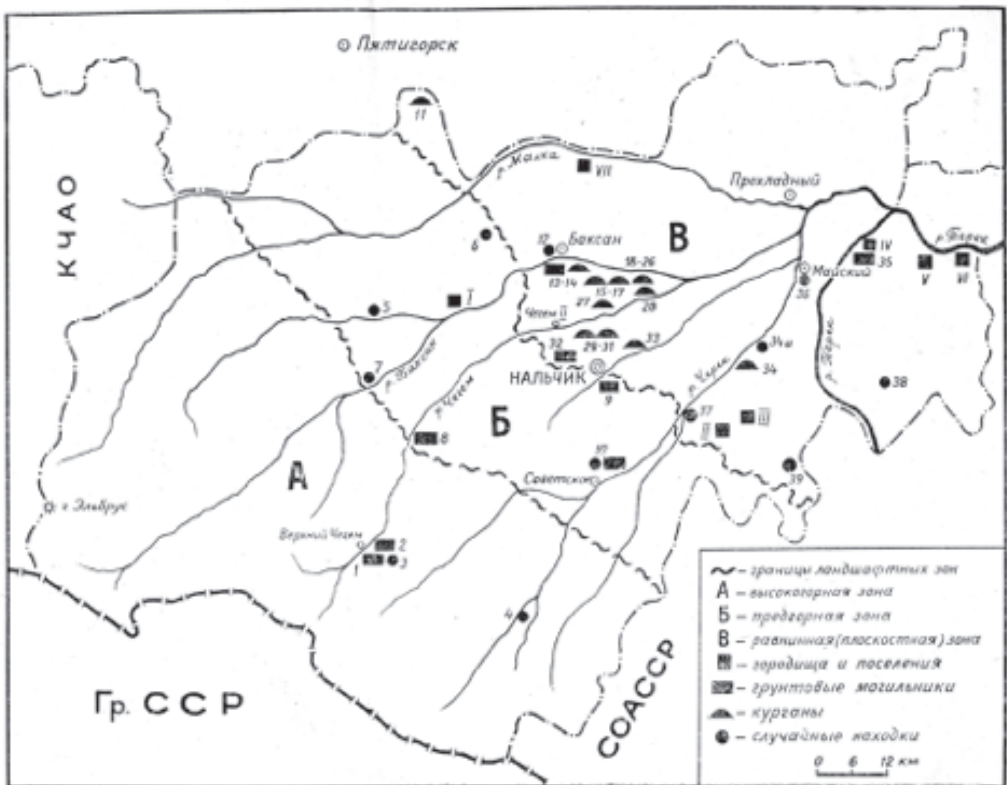




図 13-5. ナルチック国立バルカリアン-カバルディニアン博物館館長 B. M. KELEFOV 氏が筆者に著書を進呈、握手をかわす。



図 13-6. バルカリアンの職員。なぜかアイヌの人たちの感じが漂う。

論争中であるという。

(四) スキタイの古墳

カフカスのスキタイは、千年前まで存続していた。

踏査しなかったが、車から走りながら見た状況では、直径数百メートルの円墳と見られる古墳が、多数存在していた。

ギリシヤに近いブルガリアの著書の中に、古墳の写真を「ピラミッド」と明記しているので、ブルガリア人に尋ねると、ブルガリアには三角はなく、全て円墳だそうである。そうすると、エジプトの三角錐クルガン（ピラミッド）はどこで開始されたのであろうか。

スキタイのクルガン出土品は、ナルチック博物館館長の書籍に描かれているので、ここに数頁だけ転載した。

左の写真はエルミタージュ博物館が所有するスキタイの作品である(図)。日本の神話に登場する八岐大蛇が描かれている。



図13-7. スキタイの陶器に描かれた八岐大蛇(エルミタージュ博物館収蔵品。スペイン・メリダ博物館にて筆者撮影)



Рис. 4. Материалы сарматского времени предгорной зоны и случайные находки

図13-8. ナルチック市近郊の古墳出土品(サルマタイ期のスキタイ古墳を含む)。B. M. KEREFOV 氏の著書より抜粋。



Рис. 3. Материалы из Верхне-Чегемских и Баксанских могильников

13 Б. М. Керэфов

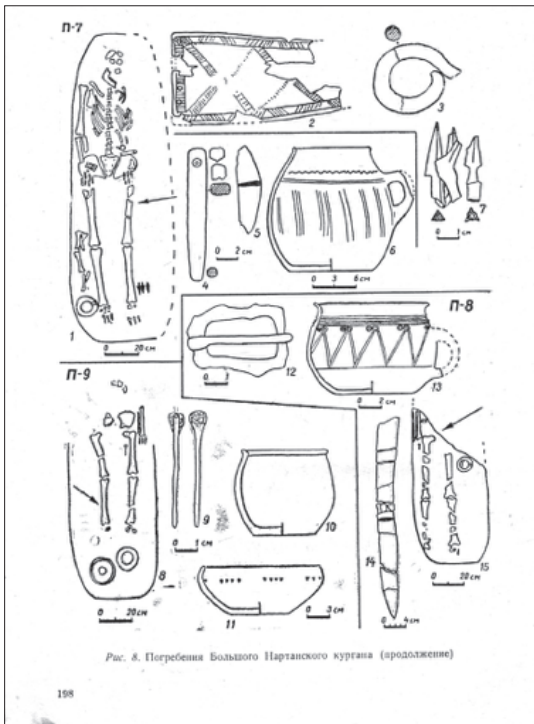
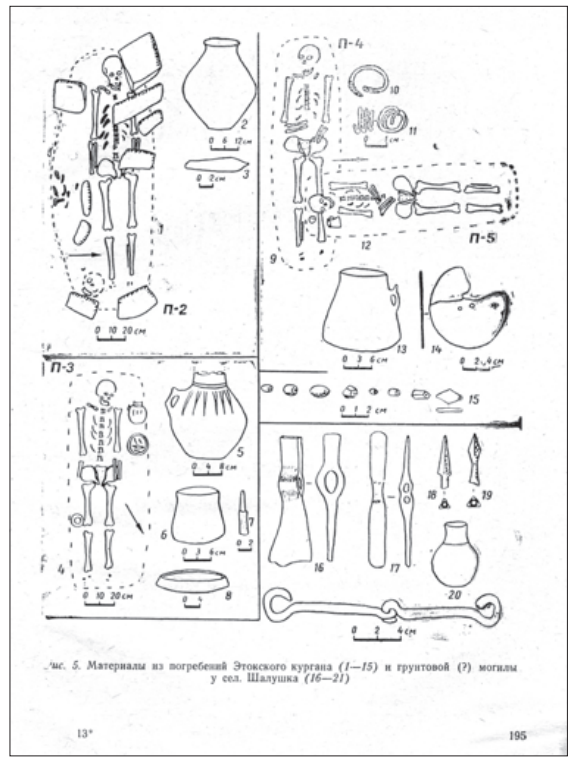
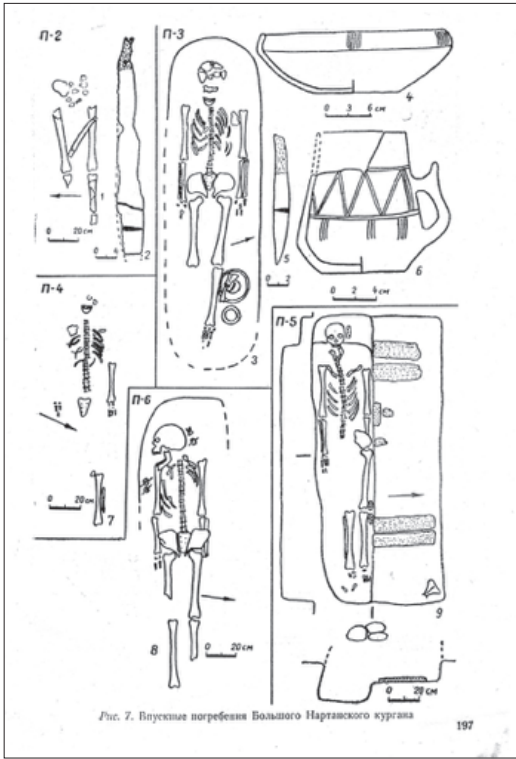


图 13-9. ナルチック市近郊の古墳出土品(B. M. KELEFOV 氏の著書より抜粋)

十四、バルカリアの服装

服装、装飾品



図 14-1. バルカリアの女性の服装



図 14-2. バルカリアの男性の服装

女性の服装は、未婚と既婚者では少し異なる。男性の服装は、マントをまとったキリスト教の人たちの服装に似ている。恥ずかしながら写真を撮ったので、見ていただきたい。私は角笛を持たせられた。女性は同行したタヤである。高松塚古墳に描かれている女性のように優雅だ。



図 14-3. 発掘出土品（カフカス考古学研究所提供）

出土した装飾品には、七宝焼と見られる物がある。七宝は中国では皇帝だけが使えるものである。中国の漢字の古語とチュルキー語、バルカリアン語などの発音と表記の比較、服装の比較などをすると、面白い結果がでるものと期待される。



図 14-4. バルカリアンの服装。左は既婚者、右は未婚者の物

図 14-5. 装飾品（ナルチック国立バルカリアン-カバルディニアン博物館）



十五、バルカリアンの城、家、墓、甲冑

(一) 城

カフカス考古学研究所のピアスラン氏は、自分の生家のあった集落を案内してくれた。家のすぐ側には小さな城が建てられていた。敵が攻めて来た時城の中に入り、梯子を外して中から石で入口を塞いでしまう、最も原始的な城である。構築年代は五〜六世紀であるが、十〜十一世紀にかけて再び上に増築された。

写真は同じ形の山城である。この城の持ち主はカフカス考古学研究所員で、我々を案内してくれた。其所に行くには川を渡らなければならず、一人がやつと通れるくらいの吊り橋がかけていた。山間に見えないように五〜六城建てられている。



図 15-1. 城とピアスラン氏



図 15-2. 城。構築年代は五〜六世紀であるが、十〜十一世紀にかけて再び上に増築された。



図 15-3. 山壁に築かれた城

て、説明を受けるとやっと判別できるぐらい山肌にとけ込んでいる。吊り橋を渡ると、我々を遮るように三〜五段の高さに積み上げられた岩壁が何重にも作られていて、道が遮断されている。道を探しながら城にたどり着くのに、約三十〜四十分かかった。この城の構築年代も五〜六世紀であるが、十一〜十二世紀頃再び上に増築された。城の大きさは約十五段四方で、南側に中庭が設けられていた。

コザック（カザフスタンやタタールの兵）が此処を襲ってきたということである。

（二） ユイで作られる家（トノノ殿）

バルカリアンの伝統的な家に案内してくれた。この家は家族が増えると建て増しを行うので、次第に円形になってゆくが、今でもバルカリアンが一軒の家に住んでいる。

日本語に共通する言語五百、シユメール語五百が嘗て使われていた、という。現在はロシア語が使われている。

彼は、「家を建てる時に近所の人が手伝いにくる事を、カフカスではウーイ(Уи)と言います。「日本では、なんと言いますか?」。私は「ユイです」と答えると、彼は「すばらしい」と大発見したように喜んだ。ユージンは多分ウーイのスペルは「Uи」であろうと話してくれたが、筆者は「ユイ」(Uи)の可能性もあると思った。

バルカリアン語「イエ」は家族長のごことで、建物は「トノノ」家庭のことを「ウチ」という。



図 15-4. バルカリアンの家屋（ナルチック国立博物館）



図 15-5. ユイで作られた最も古い家屋：殿（トノ）

図150 家(図151)の中央に建てられた大国柱



図151 火(台所)の場所に隣接する冷蔵貯蔵室





図 518. 表土を利用した屋根を太い柱で支える。



図 519. バルカリアンの家。ドアとドア枠が一帶になって作られており、それを「イツシキ」(一式)と言う。

図15-10. 川の向かいに見えたギリシヤ神殿風の家。ロシアでは「コタ」というそうだ。



(三) アラ・ハバキと男根崇拜思想

ビアスラン氏はバルカリアン語を知っているので、「アラハバキ」の意味を尋ねてみた。「アラ」は「中心」、「ハバキ」は「大きな町を意味する」と言う。英語では「キャピタル」に相当するとイルヤが通訳してくれた。小さな集落ならば、大きな家のある中心街である。



図15-11. 男根思想を示す石の彫刻

日本のアラハバキ神社は、今はその殆どが名称を変えてしまったが、昔はかなりの数になるはず。大きな町（あるいは集落）の

中心に建てられた神社だったのである。

日本の神社は、その土地の人々の氏素性を把握するための、言わば登録場所だったはずで、現代の市役所に相当すると思われる。日本のアラハバキ神社にはよく男根が祀られているが、それは氏素性の出生を明らかにすべきことを示しているのではないだろうか。

カフカス考古学研究所の応接室には、一対もある大きな男根が置かれていた。バルカリアンにも男根崇拜思想があることは、明らかであった。

(四) バルカリアンの墓

バルカリアンの豪族と一般人の墓場を案内された時、入り口で一般人の墓石を踏みつけないように、との注意をうけた。



図 15-12. バルカリアンの豪族の墓

図 15-13. バルカリアンの墓全景





図 15-14. 頂上の石が破壊された豪族の墓（上）とバルカリアン一般人の墓石（下）

石は円形に置かれたり、四角に置かれたりしていた。只の石と見間違えて、踏みつけそうになってしまう。

よく見ていると、日本の回状列石と同じではないか、という疑問を抱いてしまう。専門家に比較して貰う必要がある。

(六) 甲冑

筋兜：バルカリアンの鉄兜は筋兜である。かなり時代が古く、多分六世紀前後と思われる。下段の挂甲と鉄兜を見ると、上古・奈良時代の武人埴輪を思い浮かべてしまう。このような甲冑が日本の古墳から出土している。筋兜には、埴輪に見られるような頬当てを取り付けたと思われる穴が、上下二列に施されているのが判る。



図 15-16. 青銅兜：ナルチック国立博物館展示品



図 15-15. 筋兜：ナルチック国立博物館展示品

青銅兜：これはサルマタイ期のものであろうか。

挂甲：小札を左右二列に横に編んでいる。

アルタイのチュルキの小札も楕組と横組があるの
で、バルカリアンも同じ楕組があるはずだ。

バルカリアンは、鎧の下にダマスкас鋼で作った鎖（チェーン）を使用するが、この重量は約三百グラムと軽かった。コザック兵が作ると七百グラムになったので、結局バルカリアンに作らせたそ

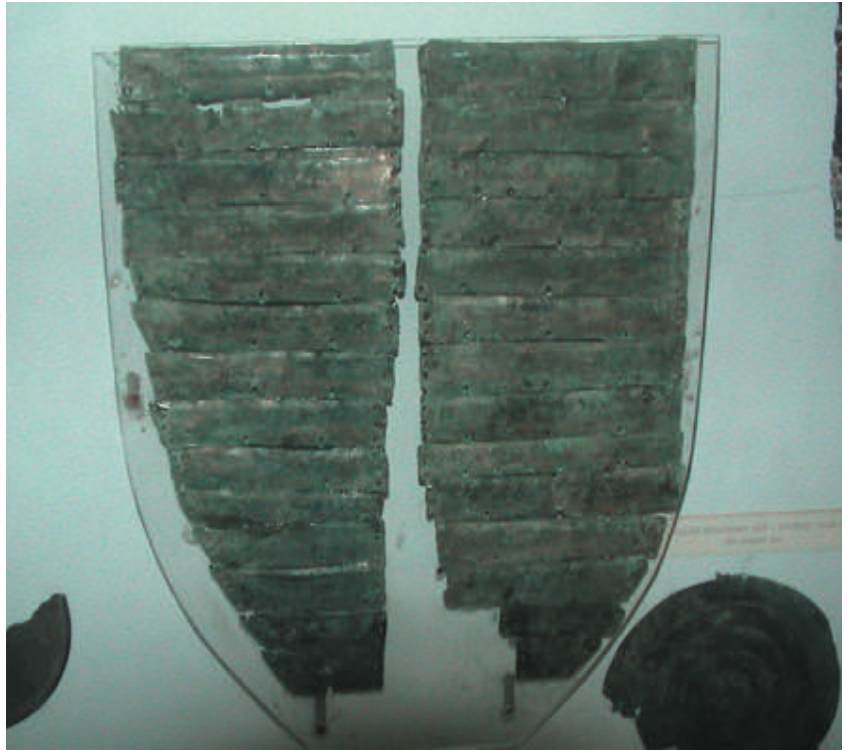


図15-17. 挂甲：ナルチック国立博物館展示品

うだ。したがって、バルカリアンはコザツクの俘囚鍛冶ということになる。

図15-18. 兜（十八世紀）：ナルチック国立博物館展示品



十六、鉾山としてのエルブルース

エルブルースの北側ロシア領の約二千坪付近に、モリブデンの採掘場がある。エルブルースに行く道路から白い建物がよく見えた。またその近くの山には、ニュートリノの研究所があり、研究者がユージン氏と私たちの宿舎を訪問してくれた。彼の話によると、ロシアから近年独立したグルジア共和国側のエルブルース山腹では、モリブデンの他にクロム、ニッケル、



図 16-1. 川から採取した褐鉄鉱

鉄鉱石などが採掘されるといふ。

年間採掘量などは定かではないが、これらの複数の鉱物が、ダマスカス刀の材料になったことが理解できた。

バルカリアンの墓場の向かい側には、銅山があった。

十七、ダマスカス刀

ダマスカス刀は、数種の方法によって作られるようだ。例えば①無地肌の地鉄、②縞模様（松皮肌）の地鉄、③柎目肌、杢目、板目肌の地鉄などがある。無地の地鉄を除く他の方法は、時代と共に発展したと考えられるが、現代では、炭素一・三%鋼、低炭素鋼（？）、モリブデン（約一%）、ニッケル（役一%）を合わせ鍛えをして作刀している。これらの金属は全てエルブルースから産出される。エルブルースの山麓表面には赤鉄鉱、褐鉄鉱が多量に見られ、氷が解けた水によって水酸化した。水は鉄を含んだ白い川になって流れている。チェゲム溪谷では、黒い砂鉄が崖の崩れから地表に流出していた。これらは採取し、分析している。

ヒツタイトで発掘された鉄はニッケルが混入されているが、隕鉄ではなく、エルブルースのニッケルが使われた可能性があるが、どうだろうか。

（一）三百年前のバルカリアン刀

ガサン氏のレストランで食事の後、我々は急いで刀のコレ

クターに会う事になった。コレクターはバルカリアンで、所持していたのは三百年前に作られたバルカリアン刀だった。この直刀は、現在のダマスカス刀のように、はっきりした地鉄の紋様は見られない。重さは約五〇〇グラムである。鏢は無く、合口拵えになっている。

彼は「この刀はダマスカス刀である」といった。そして、いきなり刀を膝に当てて一八〇度くらい曲げて見せた。しかし、手を離すと完全に真っすぐ元に戻ったのである。筆者も真似てやってみたが、日本刀よりも強靱であると感じられた。バルカリアンが鋒から一〇センチあたり下の刃部を爪で弾くと、「チーン」という音がして、炭素が一・三%くらい入っている事を実感した。

日本に帰ってからこのような音を立てる金属を探すと、ノコギリが丁度このような音であることがわかった。ノコギリの背を爪で弾くと、同じような音がした。しかし、一八〇度曲げ



図 17-1. (上) バルカリアンのシンボル
(下) 組紐

バルカリアン所持刀（300年前製作ダマスカス刀）



図 17-2. ダマスカス刀
（バルカリアン作成）
300年前に作刀されたといわれている。
強靱で180度曲げても元通り直になる。
銘が打たれ、樋が彫られている。重量約500グラム。

日本の直刀（五世紀中葉）

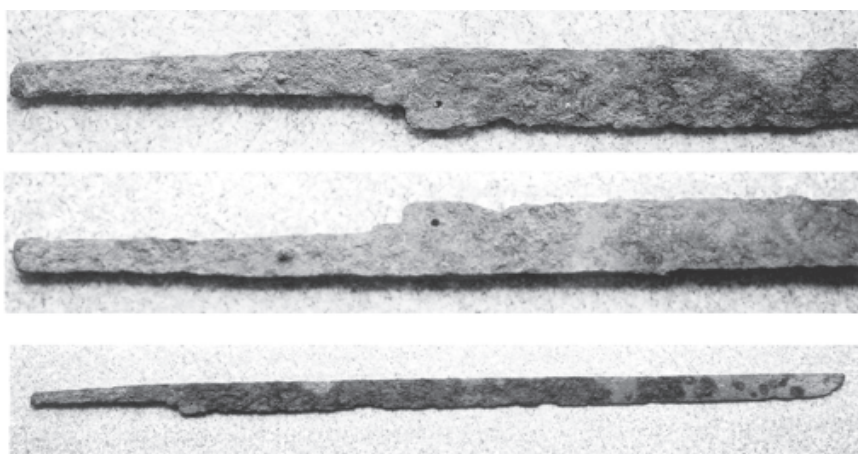


図 17-3. 直刀．全長110.3cm 刃長90.2cm 元幅4.5cm。平造り、角棟、銚子にふくらみ付く。長寸で豪壮な直刀。錆び身のため、鍛え、刃文は不明。中心は生ぶ。目釘穴の跡は一カ所。棟区なく、刃区は「へ」の字状に深い。刃区止めの穴が一つあいている。倒卵型六窓の透かし鏝が付属している。直径10.5cm。
五世紀中葉から後半の作品と推定される。北関東の某神社伝来と云われる。

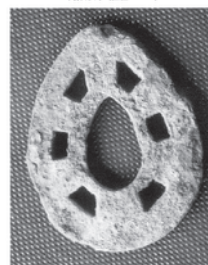




図 17-4. 前列右からカフカス考古学研究所職員（城のオーナー）、ダマスカス刀刀匠 Hamzat Bachief 氏、筆者、鍛冶職人、地元報道関係者。後列右からユージン、ユーラ・セルゲーエフ（アーリヤン研究家）、鍛冶屋の弟子。



図 17-5. 刀匠が見せてくれた馬具。日本の轡（クツワ）は、「シュ・ホ・ホアップ (Sh hoa happ)」と呼ばれる。クツワの語源の可能性はある。

ることは出来なかった。元に戻らなくなってしまったからだ。ダマスカス刀に直接手を触れる機会ができたことは、筆者には非常に参考になった。このように軽くて強靱な刀が、長年探していた武用刀である。筆者の所有する日本刀を曲げてみたが、一八〇度曲げられるものは無かった。

(二) ダマスカス刀の刀匠に面会

今回面会したカフカスのダマスカス刀刀匠 Hamzat Bachief 師は、エルブルースから採掘されるニッケル、モリブデンをそれぞれ約 1% 混入させて作刀していた。しかし、それ等を全く混入させない無垢のダマスカス刀が三百年前に作られていた事がコレクターの所持するダマスカス刀によって判明した。無垢のダマスカス刀からニッケル、モリブデンが混入されるまでの期間に、徐々に移行した経過を物語る写真をカフカス考古学研究所からいただいた。この中には、日本の古刀の祖とも称される作品に類似している物がある。

面会した刀匠は「古代の日本にはモリブデン鉱山があった」と話し、モリブデンは刀鍛冶が知らずに入れ始めた可能性がある、と言った。モリブデンを入



図 17-6. 火床の前で説明する刀匠



図 17-7. ダマスカスナイフを鍛錬する刀匠



图 11-8 工匠 Hasmat Bachi 在打铁

刀匠が作ったダマスカス・ナイフ



図 17-10. 拡大図

図 17-9. ダマスカス刀は数種の方法によって作られるようだ。①炭素量が均一で無地の鋼、②モリブデンを混入して製錬したと推定される松皮肌の地鉄、③モリブデン、ニッケルを合わせ鍛えした柾目肌、杢目、板目肌の地鉄などがある。②は古刀の地鉄にやや似ていると思われるものもある（カフカス考古学研究所提供写真 図 96, 97, 98 参照）。

皮製の鞘は、ナイフを研ぐ為にも使われる。小さな針状の筭が鞘に納められる。

無地の地鉄を除く他の方法は、時代と共に発展したと考えられるが、高炭素鋼、低炭素鋼と合わせるモリブデン、ニッケル等は全てエルブルースから産出される。エルブルースの山麓表面には赤鉄鉱、褐鉄鉱が多量に見られ、氷が解けた水によって水酸化したものである。チェゲム渓谷では黒い砂鉄が崖の崩れから地表に流出していた。砂鉄が製錬に使われたか否かは不明。

基本的なダマスカスの鍛え肌

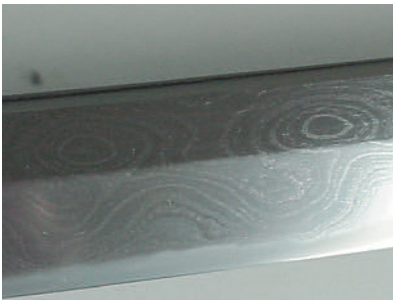


図 17-11. (上) 刀匠が説明してくれた基本的なダマスカス刀紋様。刀身部分には板目とそこに杓目を出す。刃部は柁目にする。月山に似ている。日本の大和伝について説明すると、「作り方は全く同じ」であると話してくれた。樋を付ける場合もある。これから考えると、彼らは五家伝の技術を持っている事になる。
(注) イラスト中の杓目は、筆者が説明のために判りやすく描いた物である。

図 17-12. (左) 月山 (アメリカ・アリゾナ州で筆者撮影) の地肌



図 17-13. バルカリアン刀とコザック刀をもつ筆者。日本刀と同一寸法の二尺三寸五分前後である。このように軽量で強靱な武用刀が香取神道流には最適なので、筆者は研究を始めた。

れると強靱性が増すことはよく知られている。
筆者は岩手県の久慈市で、モリブデンが路上に出ているので、そのサンプルを久慈市砂鉄史資料タタラ館館長大森竹之助氏からいただいた。これを鉄鉱石と一緒に製錬したらどうなるのだろうか。大変興味深いものがある。

日本ではダマスカス刀は作られたであろうか。筆者は否定的な考えをもっている。その理由は製錬燃料の違いである。ダマスカス刀に使用された鉄はコークスを使って製錬され、日本刀は木炭を使って製錬されたと推定されるからである。日本には硫黄分の少ない良質のコークスは産出されないため、高温製錬できなかったのではないだろうか。ダマスカス刀には、炭素一・七％程度の良質(硫黄などの不純物の混入しない) 鑄鉄が必要である。高温(千六百度製錬、炉底温度千三百度以上)による直接製鉄法で超高炭素鋼(一・七％)が作りにくかった可

バルカリアン刀とコザック刀（俘囚鍛冶）



図 17-14. 平造り弯刀。茎穴二つ。棟区が無く、刃区の上に穴が一つ開いている。強靱なダマスカス刀（製作年代不詳）



図 17-15.
上：バルカリアン刀柄（ダマスカス刀）
下：コザック刀柄（ダマスカス刀）
棟区無く、刃区上部に穴が一つ明いている。コザック刀はバルカリアンに作刀させたので、ほぼ同一形。バルカリアンは、日本の俘囚鍛冶と同じ立場であった。（カフカス考古学研究所所蔵）

日本の平造り弯刀



図 17-16. バルカリアン刀に似た平造り、棟区の無い弯刀。ダマスカス刀のように強靱ではなく、炭素量も低い。餅鉄を製錬したらしく数カ所に杓目状の鍛え肌が残る。（東北一関市所在）

図 17-17. 中心部分：棟区なし、刃区留めの穴は空けられていない。中心の穴一つ。



図 17-18. 刀身はダマスカス刀の如く数回の折り返し鍛錬で作られた可能性があり、強靱性は低い。蕨手刀には、これに類似する地鉄がまま見られる。鋒部分に片切刃の形跡が僅かに残っている。

異なる紋様のダマスカス刀（1）



図 17-19. ダマスカス・ナイフと拡大図（写真提供：コーカサス考古学研究所）

異なる紋様のダマスカス刀（2）

図 17-20. ダマスカス・ナイフと拡大図
（写真提供：コーカサス考古学研究所）





異なる紋様のダマスカス刀（3）

図 17-21. ダマスカス・ナイフと拡大図
(写真提供：コーカサス考古学研究所)



図 17-22. ダマスカス・ナイフと拡大図
(写真提供：コーカサス考古学研究所)



図 17-23. 刀匠の家で会食



図 17-24. 刀匠がダマスカス・ナイフを一振り筆者に寄贈してくれた

能性があるからだ。

古代、日本にやってきたダマスカス刀鍛冶は、木炭しかなかったので相当苦勞したのではないだろうか。

しかし、筆者が考える煤焼同時製錬法によれば、木炭一次製錬で超高炭素鋼を生産することは不可能ではない。筆者は二〇〇五年十一月に岩手県の小久慈焼きの釜元の工場で、製陶法による製鉄を見た。これを更に発展させて煤焼同時製錬を行うと、炉高の低い縦型炉で、ダマスカス鋼を生産することができると、つまり「製陶法による強靱鋼」の実現である。できた鋼に別の何かの金属を小さく積み上げて合わせ鍛えすると、鎌倉期の地鉄、特に古宝珠や古備前長光に近い物が再現できるのではないかと考えている。その製錬実験の報告は、別稿で行う予定である。

ダマスカス刀は強靱で、薄く作刀でき、百八十度まげても折れないので、筆者の求める軽量の武用刀が実現する。軽量の刀剣とは、五百グラムの刀、七百グラムの太刀である。

刀匠は、作ったナイフを乾いた骨に何十回と斬りつけたあと袖をまくり上げ、自分の腕の毛を剃ってみせた。刃こぼれや切れ味の劣化は全然認められなかった。そして筆者に寄贈してくれた。

(三) 燃料 (コークス)

ダマスカス刀鍛冶は、火床の中にコークスを入れて作刀していた。コークスに含まれる硫黄分について尋ねると、ここでとれるコークスには硫黄分はないということだった。

これから考えると、アーリヤンの製鉄は、もしかしたらコークスを使ったのではないだろうか、とう疑問がわいた。もしそ

うであるならば、高温が得られたはずだ。その結果、炭素一・七%くらいの鑄鉄が、自然にできたのではないだろうか。

製錬後すぐに取り出して水冷せず、炉内でそのまま自然冷却すると、炉壁の珪酸と鉄アルカリが反応して、スプリング鋼の如き強靱な鋼が得られる。その鑄鋼から作刀すると、差応答の段階で脱炭され炭素一・三%程度の強靱なダマスカス刀になる、と考える。

(四) アーリヤンの製錬遺跡

アーリヤンは冶金術を考案し、紀元前六世紀にアーリヤン語で冶金学 (Description of Damascus) を記録した。その著書は、現在ロシア語に訳され、市販されているという。鉄の語源『アイロン (アイロン)』はアーリヤンの名称に由来しているようだ。青銅から始まった冶金術は武器を作成するに至り、急速に普及したらしい。

アーリヤンの後衛として紀元前六世紀のスキタイがあり、今もカバルディニアとバルカリヤ民族がアーリヤンの後衛として、バクサン溪谷とチェゲム溪谷に住んでいるので、製錬遺跡についてピアスランに尋ねると、アーリヤンの製錬遺跡は、現在、万年雪の下になつていいると言う。そうすると、アーリヤンが製錬した場所は、海拔四五〇〇呎付近という高地であることになる。このような高地で製錬した場合、製錬にとって有利なのか不利なのか、という疑問がわいた。

十八、菅原 (スダバラ) と舞草 (モグサ)

筆者はカフカスから帰国後、すぐにアメリカ・ウイスコンシン州マディソン市を訪れたが、毎回私のセミナーをじっと見ている髭もじゃで一寸変わった風采の人が居た。そこで私は英語で話しかけた。「私は二〇〇五年八月にカフカスに行き、アーリヤンの後衛の言語が日本語に共通している事に驚きました」。すると彼は「私の名前はサーシというインド人で、アーリヤンですよ」といった。

「私の名前はスガワラです。インドから来た名前だと聞いていますが、どんな意味ですか？」彼は即座に答えた「スダバラです」。もう一度ゆっくり発音してもらおうと「シツダバル」であった。「どんな意味ですか？」。「シツダバルとはサンスクリット語で悟りを開いた人を意味し、仏陀と同じ意味です。モグサも同じですよ。『舞草；モグサ』という言葉に更に驚かされたので、次回に会った時に再度確かめたところ「瞑想によって悟りを開き、自由を感じた人の意味です」と教えてくれた。つまり『自由の境地』を意味するらしい。それから又話しを続け、次に香取神宮（古くは梶取と書かれたことがある）、香取神道流武術の「香取；カトリ」の意味について尋ねた。

尋ねた理由は、スペインの香取神道流の門人ベドロ・マルティンが同時期にインドを訪問し、サンスクリット語で書かれた武器の本の中に『カトリ』と書かれているのがあり、筆者に送ってくれたからだ。確かに『KATORI』（図83）と書かれていた。

そこでインド人サーシに、『カトリ』とはどのような意味なのか尋ねてみた。彼の「カトリ」の発音は、時には「カタル」に聞こえた。説明によると「カトリ」「カタル」の意味は、インドでは日本の脇差し程度の「小刀」「小剣」だけを意味するという。カフカスのバルカリアン語では「カタル；KATAL」は

全ての刀剣を意味するが、アーリヤンが移動したインドでは多様な武器が考案されたので、「カトリ」は小太刀（小刀）だけを区別して意味するようになったのであろう。ちなみに長剣は「ED内；BAHEH；バーネイ」である。

中国の元代（日本の鎌倉時代）は、中央ユーラシアのテュルキヤ、インド人の影響をかなり受けている事が判明してきた。その経路として考えられるのは、①地中海から真つすぐシルクロードを経て日本に入ってきた、②チベットを経由して蒙古人に移入されたインドのアーリヤン文化、そして、③中央ユーラシアのテュルキヤ文化が、十字路である敦煌で交

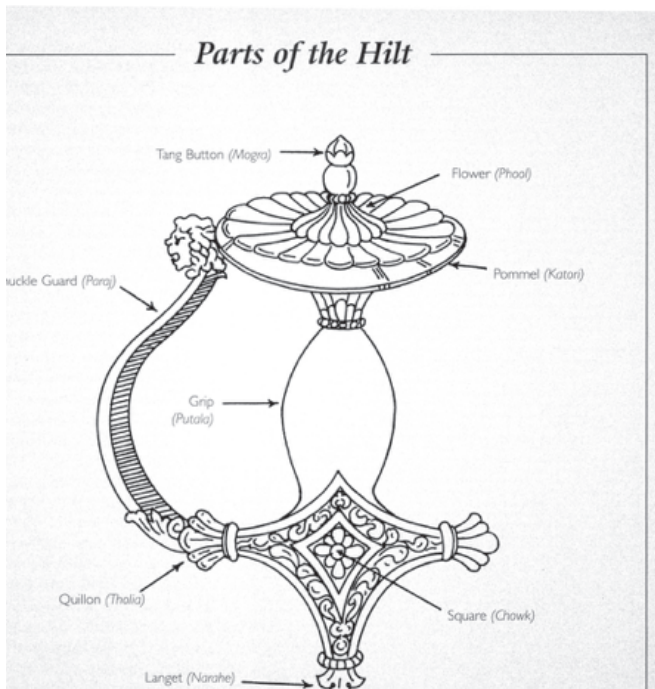


図 18-1. インドのカトリ（鏢）

わって日本に入ってきた経路、である。

そして更に、日本国内で、ウラル・アルタイ文化のアイヌ語「ノタ(刃) 又はナタ(鈍)(刀)」と「カタラ」とが融合し、「刀：カタナ」となったものと推考される。その一例として、『長刀術』『薙刀』(ナギナタ) 双方が香取神道流伝書の中に併記されているのである。

周韋著『中国兵器史稿』の「元代の武器」の中に記載されている『卡打拉；カタラ』は短剣(日本の脇差し程度)である。したがって『カタラ』は、インドからチベットを経由して移入された可能性がある。しかし、中央ユーラシアのテュルキ어의言語としても、なんら矛盾するところがない。

『中国兵器史稿』の著者は中国人周韋だが、原研究者はインド人である。それ故に、蒙古の小太刀を『卡打拉；カタラ』と書き取った可能性もある。「KATLA」の発音は、「L」を強く発音するので「カタナ」に聞こえるし、「L」のかわりに「ナタ」の「ナ」を付けた可能性も考えられる。インドのアリーヤンは「カタラ」を「カトリ」とも発音したので、いろいろな発音が有ると考えたほうがよい。

話が飛ぶが、日本の立鼓柄刀に似た柄は蒙古刀や、中国宋代の武器、カフカス地方の刀剣にも見られるので、立鼓柄は、それ等の影響を受けているやもしれぬ。

十九、直刀、蕨手刀、エムシ刀から鎬造り

弯刀(日本刀)へ

現在の日本刀は「北方文化(ウラル・アルタイ方面)と南方文化(シルクロード)を経由して日本にもたらされたアリーヤ

ン系民族文化)の合流の産物」と言える。しかし、日本国内だけで合流した訳ではなく、日本海文化圏内と考えるべきであろう。つまり、コザックや蒙古(タタール)と戦ったツングース系民族、朝鮮族、漢民族、その他の少数民族が、ごく自然にバルカリアン文化を吸収し、沿海州や極東などで合流し、独自性を加味しながら進化し、それが日本の南北から入り、日本国内で更に民族的なシンボルや好みによって変化し、再び合流したと言えるのではないだろうか。

日本国内で北方文化と見られる物にはまず蕨手刀がある。その理由は、蕨手刀の柄の形や茎尻の形がアイヌの墓標に酷似し、多様性が見られるからである。このように多くの形は南方系の刀には見られない。アイヌ(北海道ではカタナに関しては「エムシ刀」という)が製作したと推定される刀剣には、祭祀用、



図 19-1. 青森・秋田出土蕨手刀

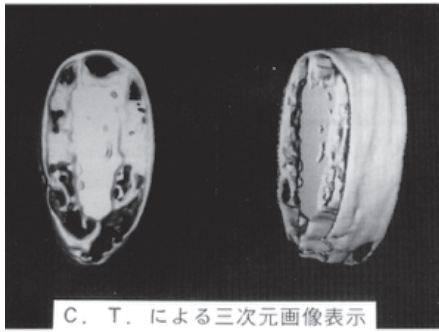


図 19-3. 柄部 CTI 写真（鏝か否かは確認不可）

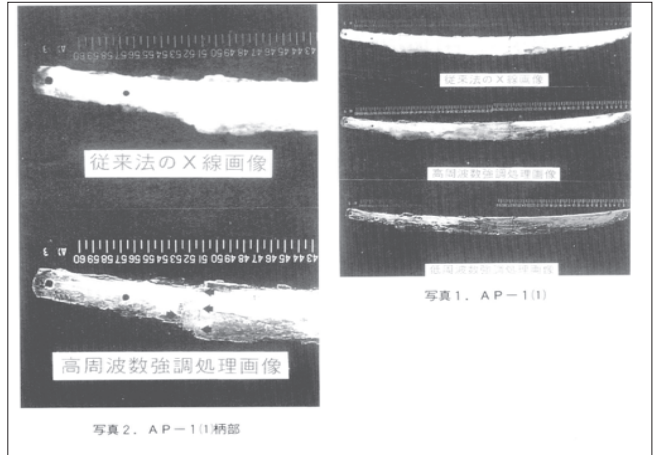


図 19-2. エムシ刀エックス線写真（佐藤矩康氏他による）



図 19-4. 久野諏訪原 2 号墳（円墳）出土刀鏝（倒卵型八窓）（小田原市教育委員会にて筆者撮影）

微が強く感じられる。例えば、青森県で出土した蔵手刀はアイヌの

儀礼刀、宝刀があるの、その定義は一樣にはできない。筆者が北海道北見市で見た妻沼浩二氏所蔵のアイヌ刀は、祭祀用の物が多かった。宝刀を東北から来たエムシの製作と見る可能性も勿論できるが、エムシ刀の彎曲の形や柄頭など、やはり北海道のアイヌ文化の特

墓標の蔵手であり、反りもアイヌ文化に見られるように関東・東北地方の物よりも強い。下北半島方面から岩手県にかけて、エムシとアイヌ文化はほぼ同一性を示している。
塩作りの竈を祭った宮城県塩竈神社のアイヌ刀は宝物庫に収められているので、奉納された物と思われる。漁業関係者がお参りする塩竈神社には捕鯨に関係している集団も参拝したはずで、その人たちの家のシンボルが茎によって識別されるようになってきていることが、アイヌの墓標から類推することができる。捕鯨は北海道と本州の間、津軽海峡から塩竈のある岩手沖は捕鯨の一つのルートである。北海道と青森・岩手県の文化的関連

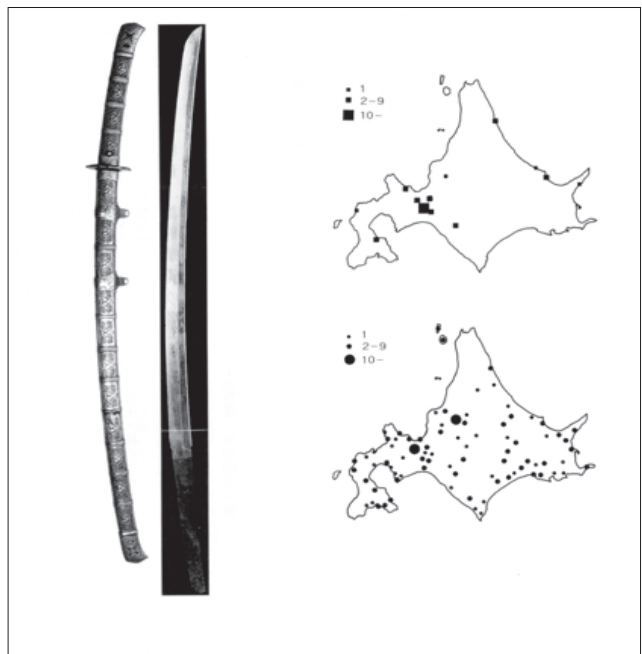


図 19-5. 「浜物」「仕出物」といわれる白金造太刀拵え（左）。
図 19-6. 上古刀期と新刀期の出土刀の分布（右）



図 19-8. スキタイの菊（太陽）型金貨（スペイン・メキシコ博物館にて筆者撮影）

方文化が混在していると思われる例では、古墳時代から見られる直刀が上げられる。一例としてあげると、小田原出土刀は八窓の倒卵型鏢にアイヌ文化を読み取る事が出来る。北海道古平出土エムシ刀の柄部目釘穴付近は八窓で、小田原出土刀の鏢と共通性が見られる。小田原出土刀の鏢には、窓と窓の間に「へつ巴」が描かれているのが興味を引く。道教に由来しているのか、

南方文化と北

性は強い。塩竈神社のアイヌ刀の鏢は透かしの物が多いが倒卵型ではなく、太陽を表す物が多い。塩を作る関係から太陽を拝する為の物だったかもしれない。何れにしても刀は武器であるよりも彼らの願望を示す物、祖先崇拜の為の物であって、言わば仏教の位牌と同じ意味を有しているのである。

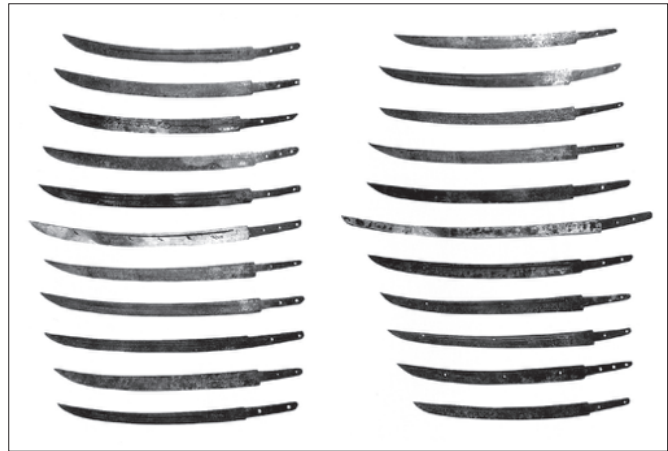


図 19-7. 塩竈神社のアイヌ刀（『日本刀の美と世界の刀』より転載）

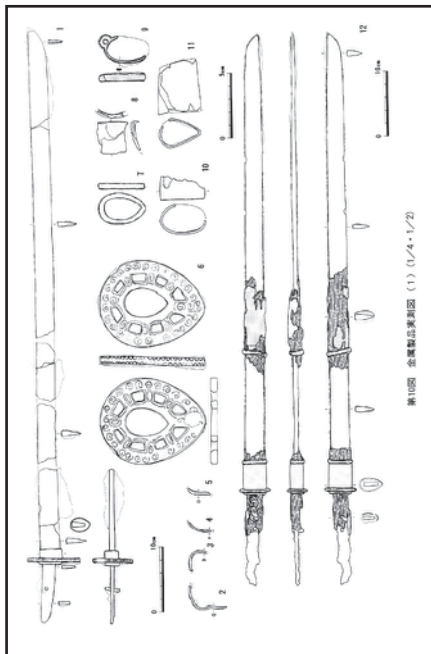


図 19-10. 久野諏訪原 2 号墳（円墳）出土品（小田原市教育委員会図録より転載）

チベット仏教に由来しているのか、はたまた神社紋の三つ巴に関係しているのか判然としない。
この刀剣は沿海州か渤海国あたりから入ってきた文化を示しているのではないだろうか。鋒両刃造りから鋒片刃造に移行

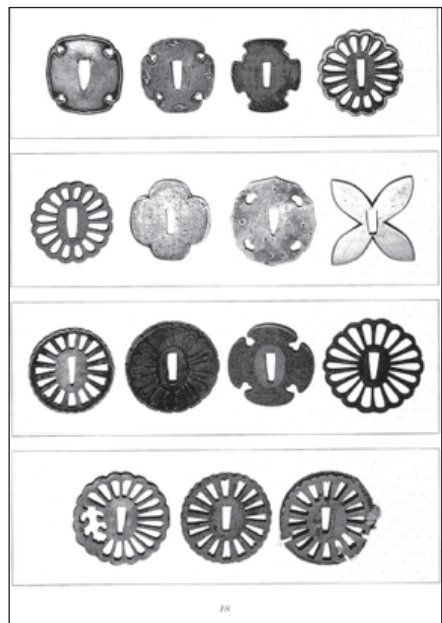


図 19-9. アイヌ刀鏢
この透かし鏢は太陽をデザインしたものであろう。中央ユーラシアではスキタイが使った。（『日本刀の美と世界の刀』より転載）

する時代性を示している。

日本刀の特徴

日本で最も発展したのは、土取りによる刃文付け、それに伴う研磨技術の発展である。これが日本刀の評価を世界的に高める一つの理由となっている。作刀技術はダマスカス刀から来ていると推定される。地鉄の持ち味を鑑定する評価は、ダマスカス刀と同様に板目、柸目、柸目で全く同様である。しかし、炭素量の違いと焼き鈍し技術（推定）の相違により、強靱性、斬れ味についてはバルカリアン刀（ダマスカス刀）以上ではないと考える。

南方系と北方系の合流、つまり平造り直刀から鑄造り弯刀への移行期と見られる初期の平造り弯刀を眼にすることは難し



図 19-12. 中鉢弘氏所蔵刀



図 19-11. エムシ刀と見られる藤原清衛棺上刀

が、皆無ではない。バルカリアン刀に酷似した平造弯刀が東北で一振り見られる。品質的にはダマスカス鋼ではなく、含銅の磁鉄鉱、つまり餅鉄で作られた可能性がある。

舞草刀研究会副会長中鉢弘氏所蔵の刀は、直刀から弯刀へ



図 19-14. 宝珠（1324。図録『草創期の日本刀』より）

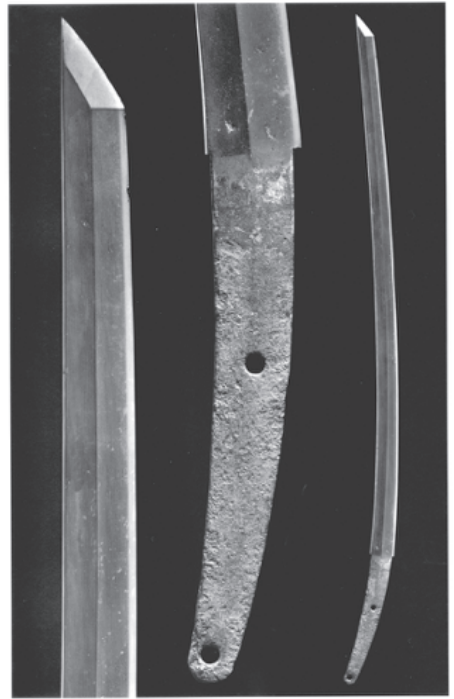


図 19-13. 古太刀(11世紀、大山祇神社所蔵)

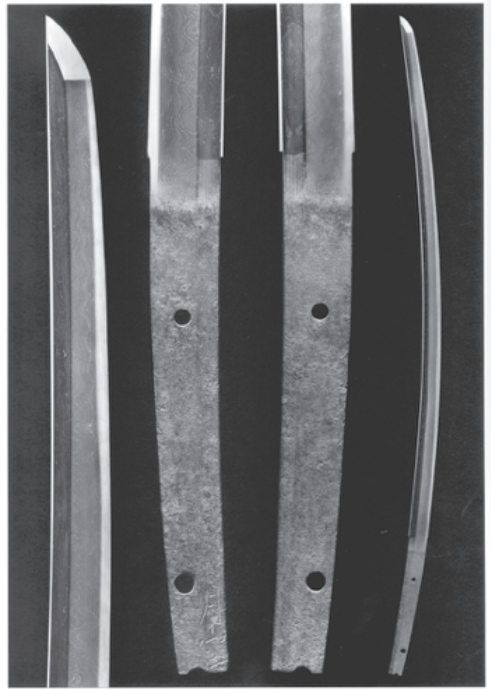


図 19-15. 月山 (ガサン) (13 世紀、図録『草創期の日本刀』より)

の移行期と推考され、製作年代は平安初期あたりであろうか。この刀はバルカリアン刀と同様棟区が無く平造り弯刀だが、刃区穴が無く、鋒部分にわずかに片切刃の形跡が残る。刃文は土取りによる直刃調である。

今後多くの刀剣を精査し、バルカリアン刀との比較をする必要がある。

二十、日本語に共通するカラチャイー・バルカル語

ナジズ・ブダエフ氏の研究

筆者はナルチック (Nalchik) 国立博物館に最初に案内され、青銅器、弯刀などを撮影した。次いでロシアに占領された事を記念するメモリアル博物館を訪れたが、日本語とカラチャイーバルカリ語 (Kalachaevo-Barkal'skogo) (これにはテュルキ語、トルコ語、キルギス語も含まれる) の比較研究をしているナジズ・ブダエフ氏にお会いした。彼の著書 (文献※) を著者 (Masiz Buddhaev) 自身からサイン入りで寄贈してくれた。この中には日本語と共通する言葉が約五百語出ているという。ロシア語表記なので翻訳して、ここに紹介する。(誤訳の責任は菅原鉄孝に帰するものであって、ナジズ・ブダエフ氏にはないことを明記しておく)。彼の研究により、古代においてカフカスの民族が、シルクロードを頻繁に往来して日本にやってきた事が判る (考古学者ピアセラニ氏指摘)。

この著書は、日本語の根幹に存在する言語が、カラチャイーバルカリ語であることを示している。本稿では、彼の論文の言語部分 (一八〇—一九八頁) だけを日本語に翻訳し、紹介する。

※文献: "West Turkey in Eastern country" by Nagiz Buddhaev, published by Nalchik, 2002.

p. 180

カバルディニアールバルカリア言語は、最初にトルコ語 (テュルキ語) から分離した。地理的に近いことがその理由としてあげられる。カフカスは多数の少数国家が存在し、そして多くの言語がある為、一つの標準語が必要であった。ロシア語以前の言語は、テュルク語が共通言語として使われていた。(中略)

日本語ジュは、バルカリアン³ (ジュ)、ロシア語ダジュ (ムズ) に共通する。

[凡例]

- ① ロシア語表記の日本語：(ナジズ・ブダエフ著)
 ② ①の発音(ひらがな表記)：(イルヤ・ソロニツイン読
 み、菅原鉄孝記)

③ 日本語①の意味(漢字表記) || (イルヤ・ソロニツイン
 訳、菅原記)

④ 国語(ナジズ・ブダエフ著)：カラチャイバルカリ
 語(кар·і·бал·), テュルク語(тюрк)、トルコ語
 (тур)、標準語(обш)、キルギス語(кир·)

⑤ ロシア語表記発音；(ナジズ・ブダエフ著)

⑥ カタカナ表記発音(イルヤ・ソロニツイン読み、菅原記)

⑦ 意味：ナジズ・ブダエフ著(イルヤ・ソロニツイン訳、
 菅原記)

p.180

① дзатта ② ざった ③ 雑多 ④ (кар·і·бал·) ⑤

затт· ⑥ ザット· ⑦ 雑多 (any thing)

① дзукууси ② じゆくすい ③ 熟睡 || (④ кар·і·бал·

カラチャイバルカリ語) ⑤ джуку ⑥ ジュク、⑤

зуку ⑥ ズク ⑦ 熟睡

バルカリアンのフはクと同一で、日本語のはん、かんに共通す
 る。例：

хвн：はん || кан·· кан

хатун：はとうん || катун·· катын

хакан：はかん || каган каган

① хо му ру ② ほむる ③ 葬 || ④ (кар·і·бал·) ⑤



図 20-1. 占領時を記念して建てられた記念館前で、著者ナジズ・ブダエフ氏(左から三人目)らと共に記念撮影する筆者。

к ё м ю л ⑥キヨミル ⑦土葬

- ① кана ②かな ③悲 ④(кар・бал) ⑤кьяна
⑥クアナ ⑦悲しい

- ① х а р а ②ハラ ③腹 ④(кар・бал) カラチャイ
バルカリ語) ⑤карын ⑥カルン ⑦腹部

- ① х о ф у ②ほうふ ③豊富 ④(кар・бал) ⑤коф
⑥コウフ、⑤кёб+лик ⑥キヨ・ブリック ⑦豊富

- ① х е р у ②へり、①кири ②きり、①кива ②きわ ④
(кар・бал) ⑤кьири ⑥クイル ⑦端

- ① х а с а ②はさ ③挟 ④(кар・бал) ⑤
кыс ⑥クス ⑦挟む

- ① х и к у ②ひく ③引く ④(кар・бал) ⑤
кьирук ⑥クルク、⑤кьирук ⑥クルク ⑦ノコで切

る

以上はフ、クのグループ。

次のグループ；日本語にはチエは少ない。

- ① с а с у ②さす ③刺す ④(кар・бал) ⑤

чанч：チャンチエ、⑤чанчу ⑥チャンチュ ⑦刺す

- ① с о к и ②そ(さ) ③崎 ④(кар・бал) ⑤
чокь ⑥チヨキ、чукуй ⑥チヨキー ⑦崎

- ① с и к к и ②しつき ③湿気 ④(кар・бал) ⑤
чыкь ⑥チユク、⑤пикь ⑥ティック ⑦湿気、桶

- ① с е й т е н ②せいてん ③手桶 ④(кар・бал) ⑤

ч е т е н ⑥チエテン ⑦手桶 (ロシア語ブエドロ)

- ① в о р у ②ほる ③張 ④(кар・бал) ⑤бар ⑥バ
ル、бормакь ⑥ボルク ⑦居る (to be)

- ① в а р у ②わる ③割る ④(кар・бал) ⑤джа
⑥ドウザル、эару ⑥ザル ⑦割る

- ① к а в а ②かわ ③側 ④(кар・бал) ⑤таба ⑥
タバ ⑦側

- ① к а т а в а ②かたわ ③片割(れ) ④(кар・бал)
⑤катында ⑥カティンダ ⑦(nearby)

- ① к а в а ②かわ ③乾 ④(кар・бал) ⑤какь ⑥
カク ⑦乾く

- ① к а в а к у ②かわく ③乾く ④(?) ⑤какь ⑥カク ⑦
乾く

- ① с а в а г и ②さわぎ ③騒ぎ ④(кар・бал) カラ
チャイーバルカリ語) ⑤джабв ⑥ジャバ、⑤забв

⑥サバ ⑦騒ぎ

- ① а р а в а ②あらわ ③露、頭 ④(кар・бал) ⑤
арыкь ⑥アルク ⑦露、頭

- ① в а р д ы ②わるじ ④(кар・бал) ⑤барды
⑥バルジ：

次のグループの例

あるく ⑥ウルドウ урду

ばるでい ⑥バルデイ барды

① कामи②かみ③神④(チュルクテュルク語)⑤ काम⑥
カム⑦神

① тенси②てんし③天使④(チュルク・テュルク語)⑤
тенгри⑥テングリ⑦天使

① синен②しねん③信念、意念④(チュルク・テュルク
語)⑤ инан⑥イナン⑦信念、意念

① таси②たし③足し④(кар・бал)⑤
тейри⑥テイリ⑦足す

① иген②いげん③威厳④(кар・бал)⑤ иги
⑥イギ⑦威厳

① дайтөр②だいとうりよう③大統領④(チュルク・
テュルク語)⑤ төре⑥チュオレイ⑦頭領

① дор②どおり③道理④(チュルク・テュルク語)⑤
төре⑥チュオレ⑦道理

① татобу②たとぶ③尊④(кар・бал)⑤

табын: タビイン、⑤ табун⑥タブーン⑦尊敬、尊
神

① эймин②えいみん③永眠④(кар・бал)⑤
эмина⑥エミナ⑦永眠

① комуру②こむる③被る④(кар・бал)⑤
комуль⑥コムル、コムリ:(葬る)

① хакаба②はかば③墓場④(кар・бал)⑤
кабырла⑥カブイラ⑦墓場

① цукни②つき③築④(кар・бал)⑤

чукуй(цукуй)⑥ツクウイ⑦クルガン(古墳)、
ただし、カラチャイ語ではクルガンの頂上だけを意味する。

① ока②おか③丘④(кар・бал)⑤ оба⑥オ
バ⑦古墳、クルガン全体

次はファミリー、家系に関する言葉；

① кара②(どこ)から④(кар・бал)⑤

карын⑥カリン+ダシ④カラチャイでは⑦「兄弟」
または「家族構成」

① кун②くん③君④(кар・бал)⑤ каум⑥

кауум⑦(家系ではなく近くに住む共同体)

① собо②そぼ③祖母、① роба②ろうば③老婆④

(チュルク・テュルク語)⑤ аба⑥アバ、⑤ баба⑥
ババ

① кёдай②きようだい③兄弟④(チュルク・テュル
ク語)⑤ кьандай⑥カンダイ⑦義兄弟

① каттай②かたい③妻④(チュルク・テュルク語)⑤
къатын⑥カトウン⑦ワイフ

① дзёсей②じよせい③女性④(кар・бал)⑤

⑤ дизай⑥デイザイ⑦女つばい人、泣いている赤ん坊
ルク語)⑤ хакаан⑥ハカン⑦王のような緑者

① кёсей②きよせい③去勢④(кар・бал)⑤

кёсе ⑥キョセイ ⑦子供の時に去勢されたりあご髭のない男性

① Рудзи ②あるじ ③(主)人 ④(тюрк・テュルク語) ⑤эр ⑥エル・ ⑤ ар ⑥アル ⑦人、男性

① Кокора ②こころ ③心(精神) ④(тюрк・テュルク語) ⑤ кёкюрек ⑥キョキュレク ⑦胸

① Уммей ②うんめい ③運命 ④(карибал) ⑤ умут ⑥ウムト・ ⑤ уммет ⑥ウミエツト ⑦運命、夢(希望)

① Кёре ②こうりよ ③考慮(論旨、論点など) ④(карибал) ⑤ кёре ⑥キョレイ ⑦考慮(論旨、論点など)

① Фурру ②ふる ③古 ④(карибал) ⑤ буррун ⑥ブルン ⑦古(代)

① Ути ②うち ③内(家庭) ④(карибал) ⑤ отоу ⑥オトウ ⑦家庭または良い家庭(金持ち)

① Тонно ②との・ ① доно ②どの ③殿(大きな家) ④(тюрк・テュルク語) ⑤ дам ⑥ダム・ ⑤ там ⑥タム ⑦建築した家

① Дай ②だい ③台(大きな食台) ④(тюрк・テュルク語) ⑤ той ⑥トイ・ ⑤ дой ⑥ドイ ⑦台(大きな食台)

① Тинака ②ていなか ③手仲(友人) ④(карибал) ⑤ тенг : テング、 ⑤ тенгнегер ⑥テングニエギョル ⑦友人

① Томадати ②ともだち ③友達 ④(карибал) ⑤ тамата ⑥タマタ ⑦マスター・オブ・セレモニー

① Кисси ②きし ③騎士 ④(тюрк・テュルク語) ⑤ киши、 ⑤ кисси ⑥キシ ⑦(騎士) 戦う人

多くの「ぐん」がある；

гун..ぐん : 群 〓

гун..ぐん : 軍(隊) 〓

явмо + гун..やまぐん : 山郡 〓

сё + гун..しょうぐん : 將軍 〓

① гун・ гунсю ②ぐんしゅう ③群衆 〓

① теyku + гун ②ていくぐん ③獣群 〓

① ним・ казак・ казахи 〓

一語は日本語と直接関係はないが、各一語は関係がある語がある。例えば「カザフ」、「コザク」は意味が少し違うように。

① савир ②さびる

① атилла ②あちら

① гун ②ぐん

① гурт ②ぐると

① сёкан ②しようかん

① санг ②さんぐ

① х а р а ② さ ら

① к и р и ② き り

① к а р ы н ② き る ン

① к и р , к и р д и , к ь ы р ② き る , き る ь ь ь , く ь ь ь

① х а р а к и р и ② は ら き り

① к и ② き ③ 着 ④ (к а р , i б а л .) ⑤ к и й ⑥ キ ⑦ 鎧
を 着 用 す る の 意

① к и м а н о ② き も の ③ 着 物 ④ (т ю р к , т е у л к 語)
⑤ к и й и м ⑥ キ イ イ ム

г а з а в а т ② к ь а з а у а т .

г и р д и ② к и р д и , г е л ь д и ② к е л ь д и .

(т ю р к , т е у л к 語) к у б е

二つの語で構成される言語 (熟語)

① г у н с о к у ② 軍 足 , ① к а т т о : ④ (т ю р к , т е у
ル 語) ⑤ к а т ы

① с и н д а й ② し ん だ い ③ 寝 台 ④ (к а р , i б a l . k a
ラ チ ャ イ ー バ ル カ ル 語) ⑤ ш и н т и к ⑥ シ ュ ン チ ャ ッ

⑦ 椅子 , カ ラ チ ャ イ 語 で は ① т а х т а ② タ ハ タ ⑤
т а т а ⑥ た た ⑦ 安 楽 椅 子

これもその例

① х а н а м и д з у ② は な み ず ③ 鼻 水 ⑤ х а н а +

м и н д а й ⑥ ハ ナ ミ ン Д а й ⑦ 鼻 水 , カ ラ チ ャ イ 語 で も 同

様である。例： ⑤ б у р у н , с у у ⑥ ブ ル ン ス ー ⑦
鼻 水

〔例〕

① и к и : ② , ① и г и ② い ぎ ⑤ и г и ⑥ イ ギ

例；

① к а т а ② か た ④ (т ю р к , т е у л к 語) ⑤
к ь а т ы ⑥ カ テ ウ

① к а т а к у ② か た く ③ 固 く ④ (к а р , i б a l .) ⑤
к ь а т ы ⑥ カ テ ユ ⑦ 固 くなる

① к а т а й ② か た い ③ 固 い ④ (к а р , i б a l .) ⑤
к ь а т ы ⑥ カ テ ユ ⑦ 固 くなる

① к а т а ② か た … ⑤ к ь а т ⑥ カ ツ ツ

① к а т а г и ② か た ぎ ③ 堅 気 ④ (к а р , i б a l .) ⑤
к ь а т ы ⑥ カ ト ウ , ⑤ а г ь а ч ⑥ ア ゲ ア チ

① к а т а й ② か た い ③ 硬 い ⑤ к ь а т ы ⑥ カ ト イ ⑦ 硬 い

① к а т а й ② か た い ③ 堅 い ⑤ к ь а т ы ⑥ カ ト イ ⑦ 堅 い

① к а т а ② か た ③ 固 (く す る) ⑤ к ь а т ы ⑤ э т ⑥ カ
ト И Э т ⑦ 固 (く す る)

① к а т а ② か た ③ 方 ⑤ к ь а т ы ⑥ カ ト И ⑦ 方 (л о в
т о)

① к а т а ② か た ③ 笑 ⑤ к ь а т ы ⑥ カ ト У И ッ プ ⑦ 笑 う

① к а т а ② か た ③ 過 程 ⑤ к ь а т ы р ⑥ カ ト У И ル ⑦ コ ン

パクト (詰まって固まる)

① к а т о к у н и ②かとくに③過当④к ъ а т ы ⑤カ
トイ⑦過当

① к а т а ②かた③鴻④ (кар・бал.) ⑤
к а т ы н д а ⑥カトウインダ⑦近く、沿う

① к и т и г а ②きちが③汚い、気違い④ (кар・
бал.) ⑤к ъ у т у р г ь а н

а с а й ⑥クウゾドルガン⑦汚い、気違い

① к а т а в а ②かたわ③傍ら④с а й н а н ⑥サイナン、

⑤с ё н а н ⑥ソウナン⑦傍ら、⑤с ы н а у ⑥スナウ⑦
傍ら、試す

① ё с у ②よす③装う④ю с ⑥ヨス、⑤ю с ю ⑥ユシユ⑦
装う

① к о н н а н ②こんなん③困難④к ъ ы й н а л ⑥クイナ
ル⑦ (見つけるのが) 困難

① я м а с и ②やまし③疾しい、病ましい④я м а н ч и ⑥
アマンチ⑦悪人

① к а м у ②かみ③噛む④ка р а ч а й к е м и л 語 ⑤
к е м и н ⑥カム⑦噛む

① к а д з е ②かぜ③風④ (кар・бал.) ⑤ к а т ы
з е л ь ⑥カトウイゼリ⑦強風

① т а к а р а ②たから③宝④ (т ю р к . т е у л к 語)

⑤ т а г а р ⑥タガル⑦品物 (売り物)

① с у г а р у ②すぎる③縋る④ (кар・бал.) ⑤
с ю й е л ь ⑥ヒユイエリ⑦立てる (建てる)

① к о р о б у ②ころぶ③転ばす (だます)④ (т ю р к .
テュルク語) ⑤к о р ⑥コル⑦無礼、カラチャイ⑤
к а р г а у ⑥カルガウ⑦悪態

① к у р а й ②くらい③位④ (т ю р к . т е у л к 語) ⑤
к у р ⑥クル⑦ (人間の) 品位

① к а й ②かい③權④ (т ю р к . т е у л к 語) ⑤
к а й ы к ⑥カイウク⑦權、ボート

① т а к а ②たか③鷹④トルコ⑤ т а г а к ⑥タガク⑦鷹

① с у г е р у ②上げる③挿げる④ (т ю р к . т е у л к
語) ⑤с у г у р ⑥スグル⑦挿げる

① с о р у ②そる③霜、霧氷④ (т ю р к . т е у л к 語)
⑤с о н а р ⑥ソナル⑦初雪

① а с а й ②あさい③浅い④а ш а к : а ш а к ⑤
а л а ш а ⑥アラシャ⑦浅い

① с о ②そ③其 (れ)④ш о ⑥シヨ (強音) ⑦それ (that)
① х а р а ②はら③はら④はら⑤疲勞⑥а р ы ⑦アリ
イ⑦疲勞

① у р а ②うら③真ん中④а р а ⑥ウラ⑦真ん中

① н и г у р у ②にぎる③学ぶ④н у г у р ⑥ヌグル⑦速い

① м о р а у ②もらう③貰う④м о р ч ⑥モルチ⑦借金

① ябуру②やぶる③破る④ ⑤ ямур⑥ヤムル⑦(破り)切る

① сома②そま③柚(木)④ ⑤ семук⑥セムク⑦柚木

① туби②とうび：(水)滴③ ④ там、тамчи⑤ ⑥ там、тамчи：

① яри②やり③ 槍④ ⑤ яр⑥ヤル⑦弓

① мута②むた③ 無体(Together)④ (тюрк、テュルク語)⑤ бутун⑥ブトゥン⑦全て

① кавва②かわ③ 川④ ⑤ ком⑥コム⑦(沼、川)渦

① комо②こも③ 菰④ (キルギス)⑤ ком⑥コム⑦敷物、カバ⑧

① афу②あふ③ 吹く(風を送りあおる)④ ⑤ юфкюр⑥コフキユル⑦吹く

① исаму②いさむ③ 勇む④ ⑤ исен⑥イセン⑦助ける

① абу②あぶ③ 焙る④ ⑤ агу⑥アグ⑦焙る

① суу②すう③ 住む④ ⑤ сау⑥サウ⑦住む、生きる

① таму②たむ③ 鉄刀④ ⑤ тему⑥てむ⑦鉄刀⑧ ⑨ темир⑩テミル⑪鉄

① сими②しみ③ 虱④ ⑤ сиби⑥シンビン⑦蠅

① комокай②こもかい③ 細かい④ (キルギス語)⑤ комосо+(カラチャイ語)⑥ кай⑦コモソ(小さい、

短い)+カイ(接尾語)：

① мани②まに③ (数えきれない)数④ ⑤ минг⑥ミン⑦数えきれない

① кото②こと③ 琴④ ⑤ комуз⑥コムズ⑦琴

① томо②とも③ 友④ ⑤ тангыш⑥タングシユ⑦知人

① бута②ぶた③ 豚④ (тюрк、テュルク語)⑤ бота⑥ボタ：驃馬、⑦ пота⑧ボタ：子豚

① кавва②かわ：① нара②なら③ 側④ ⑤ таба⑥ Таба：側⑦ ары⑧アルイ⑨傍ら

① кийку②キーク③ 形成④ ⑤ кый⑥クブイ⑦形成

① айабуму②あやぶむ③ 危ぶむ④ ⑤ айдару⑥あいだる⑦危ぶむ⑧ аймыт⑨ Айムイト⑩ 危惧

① ма②ま③ 真(接頭語)④ (тюркテュルク語)⑤ ма⑥マ⑦真(接頭語)

① ийайки②いやく③ 嫌気④ (тюркテュルク語)

⑤ ийлыкь⑥イウルク⑦羞恥心

① тәне②たね③ 種④ (тюркテュルク語)⑤ тары⑥タル⑦雑穀

① митиру②みちる③ 満ちる④ (тюркテュルク語)⑤ биттир⑥ビチル、миттир⑦ミチル⑧ 完

成する

① нани②なに③ 何、нано④なの⑤ 何の⑥ (тюркテュルク語)⑦ не⑧ネ：何、(тюркテュルク

語)⑨ не⑩ネニ⑪何の

① яма ② やま ③ 山 ④ (тюркテュルク語) ⑤

яманч ⑥ ヤマンチエ ⑦ 山麓

次のグループ

① (айны:アイヌ) йомох ② よも ③ 槍 ④ (кар

бал・カラチャイバルカリ語) ⑤ гебох ⑥ ゲボホ

⑦ 槍

① тоне ② とね ③ 湖 ④ (тюркテュルク語) ⑤ теңг

⑥ Тенг ⑦ 湖

① ягаге ② やがて ③ 間もなく ④ (тюрк・テュルク

語) ⑤ йагу ⑥ Йагук ⑦ やがて

① игаму ② いがむ ③ 歪む・① ийгаму ② ゆがむ ③ 歪

む ④ (тюркテュルク語) ⑤ эгиль ⑥ エギル・

ийиль ⑥ イニグル ⑦ 曲げる

① тама ② たま ③ 球 ④ (тюркテュルク語) ⑤ топ

⑥ Топ ⑦ 球

① и ② い ③ 胃 : ④ (тюрк・テュルク語) ⑤ иу ⑥ イウ ⑦

胃

① соку ② そく ③ 狗 (犬) ④ (тюрк・テュルク語) ⑤

кучюк ⑥ Кчук ⑦ 子犬

① со ② そ + ку ② く (狗) ⑤ ку : ⑥ 犬 + ⑤ чук ⑥ Чук

⑦ 小さい

① таси ② たし ③ だし (味) ④ (тюркテュルク語)・

⑤ татыу ⑥ Татул・(карбал・カラチャイ

バルカリ語) ⑤ татлы ⑥ タトプ ⑦ だし (味)

① цуя ② ずや ③ 艶 ④ (тюркテュルク語) ⑤ чуак ⑥

чуак・цуак ⑥ Джак ⑦ 艶

① адзи ② あぜい ③ 太陽光線 ④ (тюркテュルク語) ⑤

ачи ⑥ Ачи・⑤ ацы ⑥ Ажю ⑦ 苦み

① кори ② こり ③ 古里 (tempolary) ⑤ кере ⑥ Кыре

① аси ② あし ③ 葦 ⑤ узб ⑥ Уэб ⑦ 葦・⑤ уш ⑥ У

шю ⑦ 葦

① сара ② さら ③ 皿 ⑤ чара ⑥ Чара ⑦ 皿

① тэцу ② てつ ③ 鉄兜 ⑤ такья ⑥ Такуйа ⑦ 鉄兜

① адзе ② あぜ ③ へぜ (魚の一種) ⑤ ажау ⑥ Ажяу

⑦ (魚の全てまたは一種)

① идзимиру ② いじめる ③ 苛める (責める、拷問) ⑤

инжит ⑥ Инжит ⑦ 拷問

① катана ② かたな ③ 刀 ⑤ катар ⑥ Катар・

меч ⑥ Меч ⑦ 刀

① ток ② とく ③ 時 ⑤ чок ⑥ Чок ⑦ 時

① тати ② たち ③ 性格 ⑤ тетик ⑥ Тетик ⑦ 頭が良い人

① тен ② てん ③ 場所・① токорор ② ところ ③ 所 ⑤

ток ⑥ Ток ⑦

① кабу ② かぶ ③ 株 ⑤ каба ⑥ Каба ⑦ 株 (建物用)

① каку ② かく ③ ? 圧縮 ⑤ кьякья ⑥ Кякья ⑦ 叩く、砕く

① кару②かる③刈る⑤ къяра⑥クワラ⑦刈る、スパイ

① кано②かの③トナカイ④ (тюркテュルク語) ⑤ кийик ⑥キイク⑦トナカイ

① ямаси②やまし③ヤマシ (悪い人) ⑤ аман⑥アマン: 悪い (人) ⑤ а малцы⑥アマンツ⑦悪人

① сонан②そうなん③遭難 (事故による被害) ⑤ сыган⑥スウガン ⑦故障

① кэки②くーき③空 (気)、環境 ⑤ кёк⑥キヨク⑦空

① гот②ごーとー③強盗 ⑤ гуду⑥グードー⑦強盗

① хасиру②はしる③走る ⑤ къяц⑥クラアツ⑦走り
去る

① сонан②すいなん③遭難 ⑤ сына⑥スナ⑦遭難

⑤ сынау⑥スナウ ⑦遭難

① кобаку②こばく③境界が無い ⑤ кэб⑥キョブ⑦多
くの

① тинсей②ちんせい③鎮静 ⑤ тынцай⑥トウン
ツアイ⑦静かになる

① тампацудзю②たむばずじよ③単発銃 ⑤

тапанцв ⑥タパンツア⑦ピストル

① абуннай②あぶない (危ない) ③注意 ⑤

абынмай ⑥アブンマイ⑦注意

① дзюкусуй②じゆくすい③熟睡 ⑤ джукъу:

ジクウ: 睡眠 ⑤ зукъу⑥ジクウ⑦睡眠

① хот②ほうとう③放蕩 ⑤ гёдю⑥ギョウジュ⑦放蕩

① гётан②ぎょうたん③驚嘆 (平静) ⑤ кётен⑥キョ
ウタン⑦平静

① иру②いる③射る (ぶつける) ⑤ ур⑥ウル⑦射る (ぶ
つける)

① цуру②つる③蔓 (鞭で打つ) ⑤ сюр⑥シユル⑦する
又は鞭で打つ ⑤ сюре⑥シユレ⑦する又は鞭で打つ

① катава②かたわ③傍ら ⑤ къаты⑥カトウ⑦傍
ら ⑤ къатында⑥カトウнда⑦傍ら

① исски②いっしき③一式 (ドアと敷居) ⑤ зшик
⑥エシク⑦扉

① одзара②おーざら③大皿 ⑤ адыр⑥アドウル⑦大
皿 (など)

① кам②かみ③神 ⑤ кам⑥カム⑦シヤマン
камчи⑥カムチ⑦シヤマン

① хофу②ほうふ③豊富 ⑤ кёф⑥キョフ⑦豊富
кёп⑥キョП⑦豊富

① хара②はら③腹 ⑤ къярын⑥カルイン⑦腹

① кистри②きり③錐 ⑤ кистри⑥キリ⑦小ナイフ
кирь⑥キルウ⑦切り込む

① айган②あいگان③哀願 ⑤ ауннагъвн⑥アウナ
グアン⑦伏せる ⑤ аугъан⑥アウナグアン⑦伏せ

る

- ① Юбу не ② ゆぶね ③ 湯船 ④ Джун ⑤ ズウン ⑥ 風呂に入る ⑦ ジュウン ⑧ 風呂に入る ⑨ Ювун ⑩ ユブン ⑪ 風呂に入る

- ① гекирей ② げきらい ③ 激励 ④ Джекир ⑤ ジエキル ⑥ 激励

- ① сэйтэн ② せいてん ③ 手桶 ④ гетен ⑤ ゲテン ⑥ 手桶 ⑦ цетен ⑧ ツエテン ⑨ 手桶

- ① инин ② いんいん ③ 信任 ④ ийнан ⑤ イーナン ⑥ 信任

- ① кайтен ② かいてん ③ 回転 ④ кьайт ⑤ カイト ⑥ 回転、続ける

- ① субаяй ② すばやい ③ 素早い ④ субай ⑤ スバイ ⑥ 瘦身

- ① та ② た ③ 他 ④ тас ⑤ タス ⑥ 他

- ① ёсу ② よす ③ 装う ④ юс ⑤ ユス ⑥ юсу ⑦ ユース ⑧ 装う

- ① дайт ② дай ③ だい ④ たい ⑤ とうりよう ⑥ 大統領 ⑦ дтер ⑧ テョル ⑨ 頭領

- ① суйбун ② すいぶん ③ 水分 ④ сулу ⑤ スール ⑥ 湿る

- ① су ② す ③ 恋に落ちる ④ суй ⑤ スイ ⑥ 恋に落ちる

- ① косуй ② こすい ③ 狡い ④ кьошуу ⑤ クオシュ ⑥ 思

想を教え込む

- ① унага ② うなが ③ 促す ④ унврга ⑤ ウナルガ ⑥ 促す (同意を求める)

- ① кор ② こうりよ ③ 考慮 ④ кёрё ⑤ キョリヨ ⑥ 考慮

- ① кофун ② こふん ③ 興奮 ④ кеф ⑤ ケフ ⑥ 酩酊

- ① каэру ② かえる ③ 帰る ④ кьайырыу ⑤ カエイル ⑥ 帰る (戻る)

- ① кайсю ② かいしゆ ③ 帰、(戻) ④ кьайтыу ⑤ 帰、(戻)

- ① кокуси ② こうくし ③ 航空士 ④ кёкцю ⑤ キョクチュ ⑥ 航空士

- ① хая ② はや ③ 早 ④ хайда ⑤ ハイダ ⑥ 早く

- ① сабаги ② さわぎ ③ 騒ぎ ④ заба ⑤ ザバ ⑥ 騒ぎ

- ① карасу ② からす ③ 烏 ④ кьврга ⑤ カールガ ⑥ 烏

- ① сирами ② しらみ ③ 虱 ④ сирке ⑤ シルケ ⑥ 回虫

- ① сораи ② そらい ③ 招来 ④ сора ⑤ ソラ ⑥ 招来

- ① сэккай ② せつかい ③ 切開 ④ сёк ⑤ ショク ⑥ 切開

- ① хакка ② はつか ③ 発火 ④ чакк ⑤ チャク ⑥ 発火 ⑦ 発火 ⑧ чакьан ⑨ チャカン ⑩ 発火

- ① коннан ② こんなん ③ 困難 ④ кьыйнал ⑤ クイナル ⑥ 困難

① Какусей②かくせい③覚醒(ゆする) 〓 ⑤
къакъан⑥カカン⑦振る、ゆさぶる

① ата②あた③ゆする 〓 ⑤ ат⑥アト⑦放る

① дзатта②ざった③雑多 〓 ⑤ пакъ⑥ザット⑦何か

① дзикан②じかん③時間 〓 ⑤ пакъ⑥テュак⑦時、
ある時 〓 ⑤ заман⑥ザマン⑦時、ある時

① Кампай②かんぱい③乾杯 〓 ⑤ къампайт⑥カン
Пайт⑦乾杯

① инки②いんき③意義 〓 ① иги②いぎ③意義 〓 ⑤
иги⑥イギ⑦重要な人、意義

① согэки②そげき③狙撃 〓 ⑤ сокъ⑥ソク⑦狙撃

① токки②とつき③突起 〓 ⑤ тапка⑥Тапка⑦突起

① кансо②かんそ③乾燥 〓 ⑤ къакъсы⑥カクスイ⑦
乾燥

① каваку②かわく③乾く 〓 ⑤ къургъакъ⑥クル
Гак⑦乾燥

① сантей②さんてい③算定 〓 ⑤ санау⑥サナウ⑦算
定

① хакэн②はけん③派遣 〓 ⑤ хакан⑥ハカン⑦大人

⑤ хан⑥ハン⑦大人

① тай②たい③態 〓 ⑤ сай⑥サイ⑦平面

① окую②おくゆう③奥由 〓 ⑤ окъуу⑥オクウウ⑦教育、

知識

① ку②く③朽 〓 ⑤ къуу⑥クウ⑦朽木

① канна②かな③旅 〓 ⑤ къанна⑥カナ⑦呼吸

① адзи②あじ③(だし)味 〓 ⑤ ачи⑥アチ(だし)味

⑤ ацы⑥アツイ⑦(だし)味

① асэри②あせり③焦り 〓 ⑤ ашыкъ⑥アシク⑦焦り

⑤ асыры⑥Асыл⑦限度を超える

① ката②かた③堅い地 〓 къаты⑥クアチン⑦硬い、強
い 〓 ⑤ къат⑥カット⑦(以前にでた言葉)

① сюруй②しゆるい③獣類 〓 ⑤ сюрюу⑥Шуリュу⑦
獣類

① каму②かむ③噛む 〓 ⑤ кемир⑥ケミル⑦噛む

① китаанай②きたない③汚い 〓 ⑤ кикитай

⑥ КилКитай⑦いつも汚い人

① ириэ②いりえ③入り江 〓 ⑤ эрин⑥エリム⑦入り江

① кори②きより③距離 〓 ⑤ кери⑥ケーリ⑦距離

① тэйбо②ていぼ③堤防 〓 ⑤ тёбе⑥チヨベ⑦丘、人口
の丘

① уцурру②うつる③移る 〓 ⑤ уцур⑥ウツル⑦移す

① ути②うち③内(家、ハウス) 〓 ⑤ отоу⑥オトウ⑦大
きな家

① иэ②いえ③家族 〓 ⑤ ие⑥イエ⑦家族長

- ① и ки ну цу си ② い き う つ し ③ 生 写 し 〃
 э ки н ц и си ⑥ エ キ ム ツ イ シ ⑦ 同 じ 顔 の 人
 ① ко ро ро ② こ ろ ③ 頃 〃 ④ (кар · ба л ·) ⑤
 кьо ра у ⑥ コ ラ ウ ⑦ 頃
 ① ка та ги ② か た ぎ ③ 堅 木 〃 ④ (кар · ба л ·) ⑤
 кья та га га ч ⑥ カ ツ イ · ア ガ チ ⑦ 堅 木
 ① д зу д зу ② ず ー ず ③ 図 々 (し い) 〃 ④ (кар ·
 ба л ·) ⑤ з ю т ю ⑥ ジ ユ チ ユ ⑦ 図 々 し い 、 厚 か ま し い
 ① а ц у ② あ つ ③ (表 面 が ざ ら ざ ら し て) 厚 (い) 〃 ④
 (кар · ба л ·) ⑤ а ц у ⑥ ア ツ ウ ⑦ 表 面 が ざ ら ざ ら
 し て 厚 い
 ① бо · г я ку ② ぼ う ぎ や く ③ 暴 虐 〃 ④ (кар · ба л ·)
 ⑤ бё · ге к ⑥ Б ю Г я ку ⑦ 暴 虐
 ① хо со ко ку ② ほ そ く ③ 補 足 〃 ④ (кар · ба л ·) ⑤
 кьо ша кь ⑥ Ко Ш я ку ⑦ 補 足
 ① д з ю па ку ② じ ゅ ぱ く ③ 漂 白 〃 ④ (кар · ба л ·)
 ⑤ чи м ма кь ⑥ Ч ин Ма ку ⑦ 漂 白 〃 ⑤ ци м ма кь ⑥
 ツ イ マ ку ⑦ 漂 白
 ① и с а й ② い さ い ③ 信 任 〃 ④ (кар · ба л ·) ⑤
 и ша н ⑥ И Ш я н ⑦ 信 任
 ① са ку ню ② さ く に よ う ③ 搾 乳 〃 ④ (кар · ба л ·)
 ⑤ са у ⑥ サ ウ ⑦ 搾 乳 〃 ⑤ сы кь ⑥ ス ク ⑦ 搾 乳
 ① си ра ② し ら ③ 知 ら 〃 ④ (кар · ба л ·) ⑤

- со ру у ⑥ ソ ル ウ ⑦ 知 ら せ る
 ① та си ② た し ③ 出 し 〃 ⑤ та си ⑥ タ ザ ⑦ 出 し
 ① га ма н · си то · су ② が ま ん · し と お す ③ 我 慢 し 通 す
 〃 (кар · ба л ·) ⑤ ха ма н та за у ⑥ ハ マ ン
 キ ю ジ у у : 我 慢 し 通 す 〃 ⑤ га ма й у ⑥ ガ マ イ ウ
 ⑦ 我 慢 し 通 す
 ① ка ку то ② か く と う ③ 格 闘 〃 ④ (кар · ба л ·) ⑤
 кья гь ы ш ⑥ К а Г Ш ю ⑦ 格 闘
 ① са о ② さ お ③ 竿 〃 ④ (кар · ба л ·) ⑤ са б ⑥ サ ブ
 ⑦ 竿
 ① ха та ра ② は た ら ③ 働 (悪 事) 〃 ④ (кар · ба л ·)
 ⑤ ха та ⑥ ハ タ ⑦ 働 (悪 事) 、 損 害 〃 ⑤ ха та лы ⑥ ハ
 та у й ⑦ 危 害
 ① а ц у ку ② あ つ く ③ 厚 く (信 任) (公 開) 〃 ④ (кар ·
 ба л ·) ⑤ а цы кь ⑥ А Ч к ⑦ 厚 く (信 任) (公 開)
 ① хи ни ку ② ひ に く ③ 皮 肉 〃 ④ (кар · ба л ·) ⑤
 хи ли к ку ⑥ ヒ リ ク ⑦ 皮 肉 〃 ⑤ хи ли к к я ⑥ ヒ
 リ ヂ К я ⑦ 皮 肉
 ① га ма ② が ま ③ ガ マ (蛙) 〃 ④ (кар · ба л ·) ⑤
 ма кья ⑥ Ма Ка А ⑦ が ま (蛙)
 ① ка му ② か む ③ 噛 む 、 刺 す 〃 ④ (кар · ба л ·) ⑤
 кья бу у ⑥ Ка Бу У : 噛 む 、 刺 す 〃 ⑤ кья бу ⑥ Ка Б
 ⑦ (噛 む) У (刺 す)

① с а с у ② さす ③ 刺す ④ (кар・і бал.) ⑤
с а с к ы ⑥ サスク ⑦ アブ (虻)

① х о: к у ② ほうく ③ 俸給 ④ (кар・і бал.) ⑤
х а к ь ⑥ ハク ⑦ 俸給

① к о н о ② この ③ 客 ④ (кар・і бал.) ⑤
к ь о н а к ь ⑥ クオナク ⑦ 客

① о: д а н ② おばん ③ 胆囊、胆汁 ④ (кар・і бал.) ⑤
ё т ⑥ イヨト ⑦ 胆汁

① к а н а й ② かない ③ 家内(妻) ④ (кар・і бал.)
⑤ к ь а н а у ⑥ カナウ ⑦ 女(らしい)

① к а т а й ② かたい ③ 硬い ④ (кар・і бал.) ⑤
к ь а т ы ⑥ カツン ⑦ 硬い土壌

① б а с ② ばす ③ 罰する ④ (кар・і бал.) ⑤ б а с ⑥
б а с ⑦ 罰する、懲罰

① с э й ② せい ③ 所為 ④ (кар・і бал.) ⑤ с а у ⑥ サ
у ⑦ 所為

① т а й с э й і д о: б у ц у ② たいせいどうぶつ ③ 体勢
(生きた) 動物 ④ (кар・і бал.) ⑤ с а у л а й і
т а б у ц ⑥ サウライ・タブツ ⑦ 生きた動物

① к а н д ё ② かんじょう ③ 感情 ④ (кар・і бал.) ⑤
к а н т ё к ⑥ カンチョク ⑦ 感情

① х и м а н ② ひなん ③ 非難 ④ (кар・і бал.) ⑤
х ы н ы ⑥ フヌ ⑦ 非難

① к у м о ② くも ③ 雲(曇天) ④ (кар・і бал.) ⑤
к ё м ⑥ キヨム ⑦ 深い意味

① а с а ② あさ ③ 朝食 ④ (кар・і бал.) ⑤ а ш ⑥ А
ш у: 食べ物

① т о м о с у ② ともす ③ 灯す ④ (кар・і бал.) ⑤
т а м ы з ⑥ タムイズ ⑦ 着火、 там ы з ы к ь ⑥ タムジ
к ⑦ 着火

① т и н с с о к у ② ちんそく: ↓ぜんそく ③ 喘息 ④
(кар・і бал.) ⑤ т у н ч у к ⑥ トウンチュク、 ⑤
т у н с у к ⑥ トウンスク、 ⑤ т у н ч у к ⑥ ツンチュク
⑦ 喘息

① х а с а м у ② はさむ ③ 挟む ④ (кар・і бал.)
⑤ к ь ы с ⑥ クウス、 ⑤ к ь ы с а м а ⑥ クサマ、 ⑤
к ь ы с ы м ⑥ クスム ⑦ 挟む

① т а й е ② たいえ ③ 絶え(日没) ④ (кар・і бал.)
⑤ т а й ⑥ タイエ ⑦ 絶える

① к о: б о ② こうぼ ③ 酵母 ④ (кар・і бал.) ⑤ к ё б
⑥ キョブ ⑦ 酵母で膨らむ

① у н а д з у ② うなず ③ 頷く ④ (кар・і бал.) ⑤
у н а ⑥ ウナ ⑦ 頷く、同意する

① к а й г е н р е й ② かいげんれい ③ 戒厳令 ④ (кар・і
б а л.) ⑤ к ь а й г ь ы р ы у ⑥ カイグルウ ⑦ 警告

① д о: р и ② どうり ③ 道理 ④ (кар・і бал.) ⑤
т ё р е ⑥ チョウレイ ⑦ 道理

① д о: р и ② どうり ③ 道理 ④ (кар・і бал.) ⑤
т ё р е ⑥ チョウレイ ⑦ 道理

①カタ②かた③型④(カ・リ・バ・ル)⑤
ク・ア・ト・ウ・ル⑦型

①エイ②えい③永眠④(カ・リ・バ・ル)⑤
Э⑥エ⑦永眠、死体、悪疫、伝染
病

①カ②か③噛む④(カ・リ・バ・ル)⑤
ク・ア・ト・ウ・ル⑦噛む(噛み続ける)

①ト②ち③注意④(カ・リ・バ・ル)⑤
⑥ト⑦停止させる

①ホ②ほう③葬る④(カ・リ・バ・ル)⑤
キ⑥キ⑦キヨミユリユ⑤
⑤キ⑥キ⑦キヨミユリユ⑦
深く地下に

①バ②わる③悪い(病気で)④(カ・リ・バ・ル)⑤
⑤ア⑥ア⑦病気

①В②あ③(話し)相手④(カ・リ・バ・ル)⑤
⑤ア⑥ア⑦話し合う

①ソ②そ③尊大④(カ・リ・バ・ル)⑤
サ⑥サ⑦気取り屋、てらい屋

①キ②き③共有④(カ・リ・バ・ル)⑤
ク⑥ク⑦臭い物に蓋をする

①Д②ぜん③全(部)④(カ・リ・バ・ル)⑤
Д⑥Д⑦全(部)
Д⑥Д⑦ゼ⑦ゼ⑦全(部)

①Ц②、с③с④注ぐ⑤注ぐ⑥注ぐ⑦注ぐ⑧注ぐ⑨注ぐ⑩注ぐ⑪注ぐ⑫注ぐ⑬注ぐ⑭注ぐ⑮注ぐ⑯注ぐ⑰注ぐ⑱注ぐ⑲注ぐ⑳注ぐ㉑注ぐ㉒注ぐ㉓注ぐ㉔注ぐ㉕注ぐ㉖注ぐ㉗注ぐ㉘注ぐ㉙注ぐ㉚注ぐ㉛注ぐ㉜注ぐ㉝注ぐ㉞注ぐ㉟注ぐ㊱注ぐ㊲注ぐ㊳注ぐ㊴注ぐ㊵注ぐ㊶注ぐ㊷注ぐ㊸注ぐ㊹注ぐ㊺注ぐ㊻注ぐ㊼注ぐ㊽注ぐ㊾注ぐ㊿注ぐ

①С②す③注ぐ④(カ・リ・バ・ル)⑤
З⑥ズ⑦ズ⑧ズ⑨ズ⑩ズ⑪ズ⑫ズ⑬ズ⑭ズ⑮ズ⑯ズ⑰ズ⑱ズ⑲ズ⑳ズ㉑ズ㉒ズ㉓ズ㉔ズ㉕ズ㉖ズ㉗ズ㉘ズ㉙ズ㉚ズ㉛ズ㉜ズ㉝ズ㉞ズ㉟ズ㊱ズ㊲ズ㊳ズ㊴ズ㊵ズ㊶ズ㊷ズ㊸ズ㊹ズ㊺ズ㊻ズ㊼ズ㊽ズ㊾ズ㊿ズ

①К②け③消す④(カ・リ・バ・ル)⑤
К⑥ケ⑦ケ⑧ケ⑨ケ⑩ケ⑪ケ⑫ケ⑬ケ⑭ケ⑮ケ⑯ケ⑰ケ⑱ケ⑲ケ⑳ケ㉑ケ㉒ケ㉓ケ㉔ケ㉕ケ㉖ケ㉗ケ㉘ケ㉙ケ㉚ケ㉛ケ㉜ケ㉝ケ㉞ケ㉟ケ㊱ケ㊲ケ㊳ケ㊴ケ㊵ケ㊶ケ㊷ケ㊸ケ㊹ケ㊺ケ㊻ケ㊼ケ㊽ケ㊾ケ㊿ケ

①Х②は③張る④(カ・リ・バ・ル)⑤
К⑥カ⑦カ⑧カ⑨カ⑩カ⑪カ⑫カ⑬カ⑭カ⑮カ⑯カ⑰カ⑱カ⑲カ⑳カ㉑カ㉒カ㉓カ㉔カ㉕カ㉖カ㉗カ㉘カ㉙カ㉚カ㉛カ㉜カ㉝カ㉞カ㉟カ㊱カ㊲カ㊳カ㊴カ㊵カ㊶カ㊷カ㊸カ㊹カ㊺カ㊻カ㊼カ㊽カ㊾カ㊿カ

①Т②ち③えん④遅延⑤(カ・リ・バ・ル)⑥
⑥ト⑦遅延

①К②か③鉄④(カ・リ・バ・ル)⑤
К⑥К⑦К⑧К⑨К⑩К⑪К⑫К⑬К⑭К⑮К⑯К⑰К⑱К⑲К⑳К㉑К㉒К㉓К㉔К㉕К㉖К㉗К㉘К㉙К㉚К㉛К㉜К㉝К㉞К㉟К㊱К㊲К㊳К㊴К㊵К㊶К㊷К㊸К㊹К㊺К㊻К㊼К㊽К㊾К㊿К

①С②し③しゅ④しゅ⑤しゅ⑥しゅ⑦しゅ⑧しゅ⑨しゅ⑩しゅ⑪しゅ⑫しゅ⑬しゅ⑭しゅ⑮しゅ⑯しゅ⑰しゅ⑱しゅ⑲しゅ⑳しゅ㉑しゅ㉒しゅ㉓しゅ㉔しゅ㉕しゅ㉖しゅ㉗しゅ㉘しゅ㉙しゅ㉚しゅ㉛しゅ㉜しゅ㉝しゅ㉞しゅ㉟しゅ㊱しゅ㊲しゅ㊳しゅ㊴しゅ㊵しゅ㊶しゅ㊷しゅ㊸しゅ㊹しゅ㊺しゅ㊻しゅ㊼しゅ㊽しゅ㊾しゅ㊿しゅ

①Ц②つ③つ④風呂に入る⑤(カ・リ・バ・ル)⑥
⑤З⑥ズ⑦ズ⑧ズ⑨ズ⑩ズ⑪ズ⑫ズ⑬ズ⑭ズ⑮ズ⑯ズ⑰ズ⑱ズ⑲ズ⑳ズ㉑ズ㉒ズ㉓ズ㉔ズ㉕ズ㉖ズ㉗ズ㉘ズ㉙ズ㉚ズ㉛ズ㉜ズ㉝ズ㉞ズ㉟ズ㊱ズ㊲ズ㊳ズ㊴ズ㊵ズ㊶ズ㊷ズ㊸ズ㊹ズ㊺ズ㊻ズ㊼ズ㊽ズ㊾ズ㊿ズ

①У②う③う④上手⑤(カ・リ・バ・ル)⑥
Б⑦バ⑧バ⑨バ⑩バ⑪バ⑫バ⑬バ⑭バ⑮バ⑯バ⑰バ⑱バ⑲バ⑳バ㉑バ㉒バ㉓バ㉔バ㉕バ㉖バ㉗バ㉘バ㉙バ㉚バ㉛バ㉜バ㉝バ㉞バ㉟バ㊱バ㊲バ㊳バ㊴バ㊵バ㊶バ㊷バ㊸バ㊹バ㊺バ㊻バ㊼バ㊽バ㊾バ㊿バ

①К②か③噛む④(カ・リ・バ・ル)⑤
К⑥К⑦К⑧К⑨К⑩К⑪К⑫К⑬К⑭К⑮К⑯К⑰К⑱К⑲К⑳К㉑К㉒К㉓К㉔К㉕К㉖К㉗К㉘К㉙К㉚К㉛К㉜К㉝К㉞К㉟К㊱К㊲К㊳К㊴К㊵К㊶К㊷К㊸К㊹К㊺К㊻К㊼К㊽К㊾К㊿К

①С②さ③さ④去る⑤(カ・リ・バ・ル)⑥
С⑦サ⑧サ⑨サ⑩サ⑪サ⑫サ⑬サ⑭サ⑮サ⑯サ⑰サ⑱サ⑲サ⑳サ㉑サ㉒サ㉓サ㉔サ㉕サ㉖サ㉗サ㉘サ㉙サ㉚サ㉛サ㉜サ㉝サ㉞サ㉟サ㊱サ㊲サ㊳サ㊴サ㊵サ㊶サ㊷サ㊸サ㊹サ㊺サ㊻サ㊼サ㊽サ㊾サ㊿サ

①А②あ③あ④争う(正義を)⑤(カ・リ・バ・ル)⑥
А⑦А⑧А⑨А⑩А⑪А⑫А⑬А⑭А⑮А⑯А⑰А⑱А⑲А⑳А㉑А㉒А㉓А㉔А㉕А㉖А㉗А㉘А㉙А㉚А㉛А㉜А㉝А㉞А㉟А㊱А㊲А㊳А㊴А㊵А㊶А㊷А㊸А㊹А㊺А㊻А㊼А㊽А㊾А㊿А

бал.) ⑤ арасыз ⑥ аласыз ⑦ 疑い無く、正義

① мукиреку ② むきりよく ③ 無気力 ④ (карри

бал.) ⑤ мугурайыу ⑥ муглайриуу ⑦ 無気力

① куро: ② くろう ③ 苦勞 ④ (каррибал.) ⑤

кюреш ⑥ キュレシユ ⑦ 苦勞

① та ② た ③ 滴 ④ (каррибал.) ⑤ там ⑥ タム ⑦ 滴、

雫

① ко:сей ② こうせい ③ 去勢 ④ (каррибал.) ⑤

кёсе ⑥ キョセ ⑦ 去勢

① каку ② かく ③ 書く、秘書 ④ (каррибал.) ⑤

сакъ ⑥ Сак ⑦ 注意深く

① каэ ② かえ ③ 怒る、沸騰 ④ (каррибал.) ⑤

кайна ⑥ Кайна ⑦ 怒る、沸騰

① адзи ② アジ ③ 味出し ④ ацы ⑥ АцУ ⑦ 味

① хакаба ② はかば ③ 墓場 ④ кьябырла ⑥ КяАб

ЛаПа ⑦ 墓場

① уцу ② うつ ③ 打つ ④ (каррибал.) ⑤ уцух ⑥

УцФ ⑦ 打つ

① кавва ② かわ ③ 皮 ④ (каррибал.) ⑤

къабук ⑥ КаБуК ⑦ 皮

① бо:гуй ② ぼうぐい ③ 棒杭 ④ (каррибал.) ⑤

багъана ⑥ БаГана ⑦ 棒杭

① юрэкей ② ゆうれいけい ③ 遊離 (世界を歩き回る) ④

④ (каррибал.) ⑤ джюрю ⑥ ДжУриуу、⑤

зюрю ⑥ ЮУриуу、⑤ юрю ⑥ Юриу ⑦ 遊離

① кару ② かる ③ 刈る ④ (каррибал.) ⑤

кьярыу ⑥ КЮриуу ⑦ 刈る

① нандзи ② なんじ ③ 何時 ④ (каррибал.) ⑤

ненча ⑥ НанЧа ⑤ ненца ⑥ НенЧа ⑦ 何時

① тир: ② ちりよう ③ 治療 ④ (каррибал.) ⑤

тири ⑥ ЧИリ ⑦ 回復

① игги ② いぎ ③ 意義 (同意) ④ (каррибал.) ⑤

игди ⑥ いぎじ ⑦ 意義、同意

① саммякц ② さんみやく ③ 切り株 ④ (карри

бал.) ⑤ тёммек ⑥ ТонМияク ⑦ 切り株

① цукку ② つく ③ 築 ④ (каррибал.) ⑤ цуккуй

⑥ ЦКуй ⑦ (古) 墳の頂上

① сиггами ② しがみ ③ 茂み ④ (каррибал.) ⑤

цыгана ⑥ ТеУГана ⑦ 茂み

① курасу ② くらす ③ 暮らす (幸せに) ④ (карри

бал.) ⑤ кьяурау ⑥ КраУ ⑦ 暮らす (幸せに)

① кассай ② かつさい ③ 喝采 ④ (каррибал.) ⑤

карс ⑥ КарС ⑦ 喝采

① ки ② き ③ 着 ④ (каррибал.) ⑤ кийин ⑥ КИ

Ин、⑤ кийим ⑥ КИМ ⑦ 着る、着物

① хаэру ② はえる: ↓ほえる ③ 吠える ④ (карри

- бал.) ⑤ къяйрыл ⑥カエイリュウ ⑦吠える
- ① кэйсе ②けいしえん ③回生 ④(кар.ibal.) ⑤
кесекле ⑥ケイシエクレン ⑦回復、回生
- ① бирёку ②びりよく ③微力(資力) ④(кар.ibal.)
бал.) ⑤ берину ⑥ベリウ ⑦微力(資力)
- ① саку ②さく ③策 ④(кар.ibal.) ⑤ сакъ ⑥
サク ⑦策
- ① кого ②こご ③凝る、凍る ④(кар.ibal.) ⑤
кёгер ⑥キヨゲル ⑦(顔が強ばる) 凍る
- ① тикэй ②ちけい ③地形 ④(кар.ibal.) ⑤
тийре ⑥チレイ ⑦地域、地方
- ① тай ②たい ③他移(移動) ④(кар.ibal.) ⑤
тай ⑥タイ ⑦他移、移動
- ① нэра ②ねら ③狙う ④(кар.ibal.) ⑤ ма
⑥マラ ⑦狙う
- ① тэги ва ②てぎわ ③手際 ④(кар.ibal.) ⑤
тийиу ⑥Тейиу ⑦手際
- ① сиба ②しば ③柴 ④(кар.ibal.) ⑤ сибир ⑥
Шибил. ⑤ сибирки ⑥Шибилки ⑦柴
- ① юмэ ②ゆめ ③夢 ④(кар.ibal.) ⑤ оюм ⑥オユ
ム ⑦アイデア、考え方
- ① ходокоси ②ほどこし ③施し ④(кар.ibal.)
⑤ халакъ ⑥ハダク ⑦施し

- ① тюсей ②ちゆうせい ③忠誠 ④(кар.ibal.) ⑤
тэзюу ⑥チヨウジュウ ⑦忍耐、がんばり
- ① бокуя ②ぼくや ③牧野 ④(кар.ibal.) ⑤
бакъ ⑥バク ⑦肥育
- ① у ②う ③打 ④(кар.ibal.) ⑤ ур ⑥ウル. ⑤ у
⑥ウウ ⑦打つ
- ① тейё ②たいよう ③太陽(光線) ④(кар.ibal.)
⑤ тийек ⑥Тейек ⑦光線
- ① сётен ②しょうてん ③商店 ④(кар.ibal.) ⑤
сатыу ⑥サトウウ ⑦売る
- ① тэппэн ②てっぺん ③天辺 ④(кар.ibal.) ⑤
тёппе ⑥Тёппе ⑦天辺
- ① когатоино ②こがとの ③小形の ④(кар.ibal.)
бал.) ⑤ къягъаннакъ ⑥クアグアンナク ⑦子供、
小さい物
- ① кесу ②けす ③消す：削る ④(кар.ibal.) ⑤
кес ⑥Кес ⑦削る
- ① ката ②かた ③硬い ④(кар.ibal.) ⑤ къят
⑥カツト ⑦硬い
- ① тонахин ②ちょうなひん ③盗難 ④(кар.ibal.)
бал.) ⑤ тоналгъан ⑥トウナウガン ⑦盗難
- ① тонан ②とнан ③盗む ④(кар.ibal.) ⑤
тонау ⑥トナウ ⑦盗む(過程)

① хэри②へり③縁④(кар・бал)⑤
кыйыр⑥クイル⑦縁

① касигу②かしぐ③傾ぐ④(кар・бал)⑤
кыйсык⑥クイスク⑦傾ぐ

① цубу②つぶ③粒④(кар・бал)⑤ цубур
⑥ツブル⑦微小

① эн②эн③円④(кар・бал)⑤ эн⑥エン⑦広
い

① ханэ②はね③羽④(кар・бал)⑤
кьанат⑥クアナツト⑦羽

① кэ②こう③考(慮)④(кар・бал)⑤
кёллю⑥キョウリュウ⑦教虜

① ирэдзиниэ②いれじにえ③入れ知恵④(кар・
бал)⑤ юйрет⑥ユイレツト⑦入れ知恵

① макау②まかう③巻く④(кар・бал)⑤
матау⑥マタウ⑦巻物

① китигай②きちがい③気違い④(кар・бал)⑤
⑥кутурган⑥クツルガン⑦悪い人(気違い)

① гаман②がまん③我慢④(кар・бал)⑤
гам⑥ガム⑦我慢し合う

① арау②あらう③洗う④(кар・бал)⑤
ариу⑥アリウ⑦清潔

① дзётай②じょうたい③図体④(кар・бал)⑤

⑤ джутай⑥ジユタイ⑦
腹の減っている人

① киру②きる③着る④(кар・бал)⑤ кий⑥
кй⑦ кийир⑥キユウ⑦着る

① тано②たの③頼(もしい)④(кар・бал)⑤
таныш⑥タムシ⑦友人または家族の一員

① кабу②かぶ③冠る④(кар・бал)⑤
кьапла⑥カ普拉⑦冠る

① сёрай②しょうらい③ぼんくら④(кар・бал)⑤
⑤сер⑥セル⑦серрай⑥セルヤй⑦ボンクラ

① дзбун②じゅうぶん③十分④(кар・бал)⑤
зубан⑥ズバン⑦十分に楽しむ

① суру②する③擦る④(кар・бал)⑤
⑤сюрт⑥シヨルト⑦擦る

① асамэсину②あさめしぬ③朝飯抜き④(кар・
бал)⑤вшамай⑥アシャマイ⑦朝飯抜き

① цуме②つめ③抓る④(кар・бал)⑤
цимди⑥トゥムデイ⑦抓る

① танти②たんち③探知④(кар・бал)⑤
тинт⑥チント⑦分析、解析

① сара②さら③晒す④(кар・бал)⑤ сары
⑥サリウ⑦黄色、輝く

① онси②おんし③恩知らず④(кар・бал)⑤

а н г с ы з ⑥ а н г с ы з ⑦ 恩知らず、気違い

参考文献

З а п а д н ы е Т ю р к и в С т р а н а х В о с т о к а , Н .
М . Б н д а р е в , Г . Н а н ь ч и к 2002 г . ("West Turkey in Eastern
country" by Nagiz Buddaev, published by Narvik, 2002),